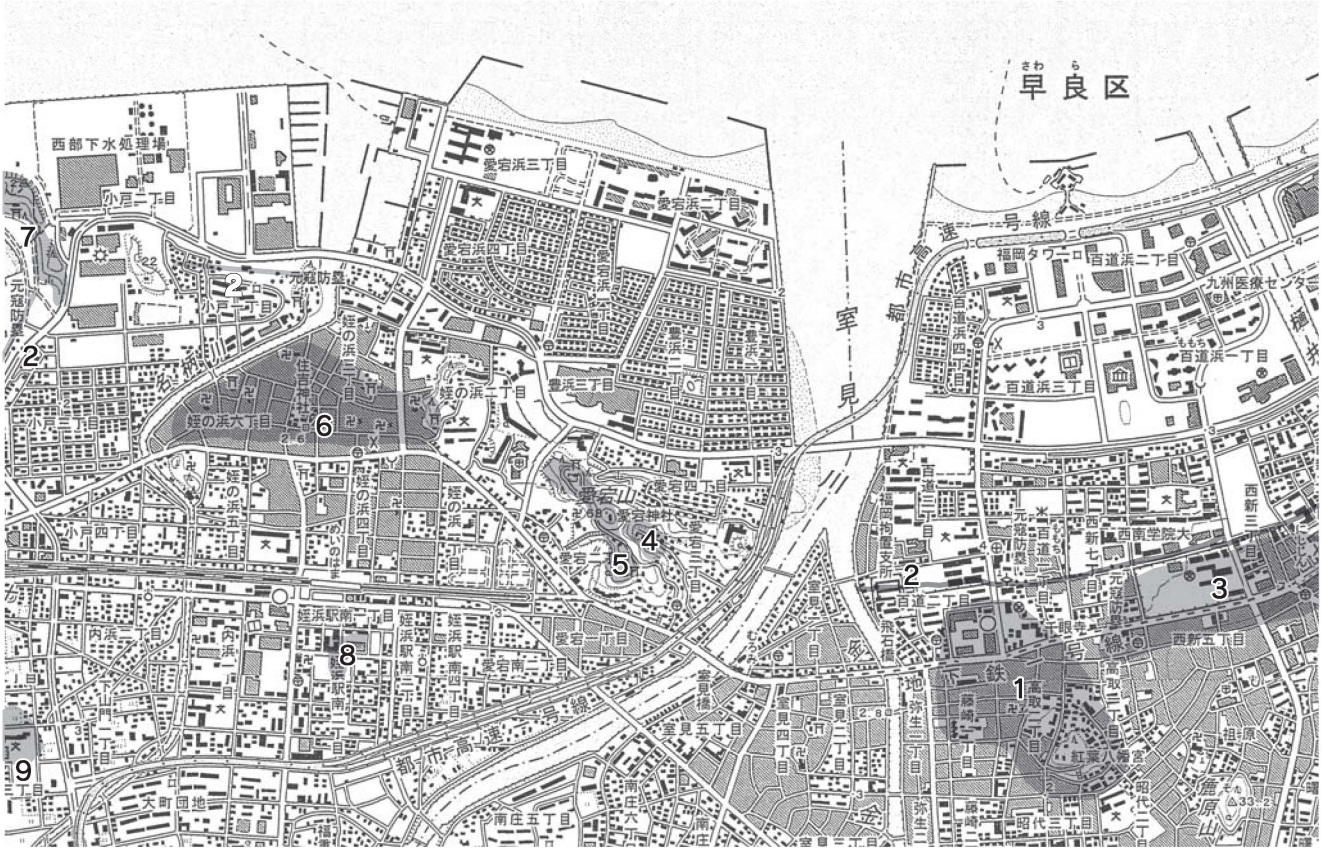
藤崎遺跡19

―藤崎遺跡第37次調査報告―

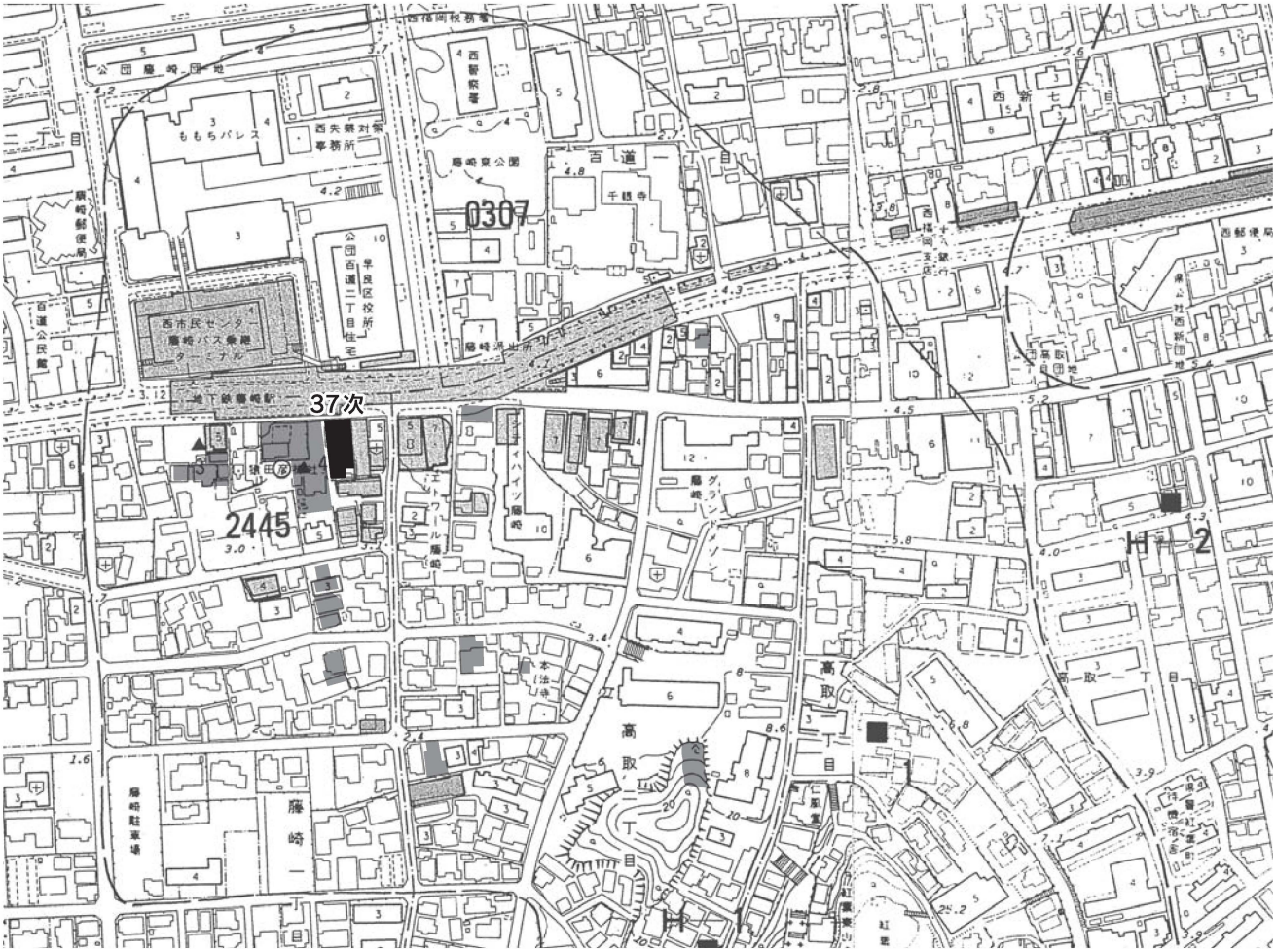
福岡市埋蔵文化財調査報告書1240集

２０１４

福岡市教育委員会



第 1 図　周辺遺跡分布図（1/2500）



第 2 図　調査地点位置図（1/4000）

序

玄界灘に面し古くから大陸との文化交流の玄関口であった福岡市には、豊かな自然と文化が残されています。その中でも早良区は大陸との交流で古くから栄え、遺跡も多く存在しています。これらを保護し、未来へと伝えていくのは本市に課せられた責務であります。しかし、近年の著しい都市化による市街地の拡大により、その一部が急速に失われつつあることもまた事実です。福岡市教育委員会は開発によってやむを得ず失われていく遺跡について、事前の発掘調査を行い、記録の保存に努めています。

今回報告する藤崎遺跡の発掘調査報告書は共同住宅建設に伴う調査成果についての記録です。この調査では弥生時代前期から近代まで連綿と続く集落を確認しました。本書が文化財保護への理解と認識を深める一助となり、また研究資料として御活用頂ければ幸いに存じます。

最後に発掘調査から報告書の刊行に至るまで、多くの方々のご理解とご協力を賜りましたことに対して心から謝意を表する次第であります。

平成26年3月24日

福岡市教育委員会
教育長　酒井龍彦

例言

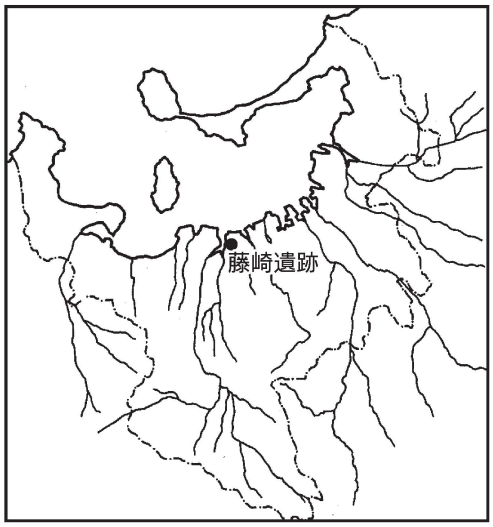
□本報告書は早良区藤崎1丁目９番の共同住宅建設工事に伴って2012年6月10日から9月14日にかけて発掘調査を行った藤崎遺跡第37次調査の報告書である。
□本書に収録した発掘調査は福岡市経済観光文化局の屋山洋が担当した。
□遺構の実測と写真撮影は屋山が、遺物実測と製図等を濱石正子・屋山が担当した。
□本書で用いた方位は磁北である。
□本書に関わる図面・写真・遺物など一切の資料は福岡市埋蔵文化財センターに収蔵・保管される予定である。
□貿易陶磁の分類は大宰府条坊跡ＸＶ－陶磁器分類編－(2000年)太宰府市教育委員会を参照した。

遺跡調査番号	１２０７	遺跡番号	０３０７	分布地図番号	NO81 室見
調査地地番	福岡市藤崎1丁目9番				
開発面積	５０２㎡	調査面積	３５８㎡	調査原因	共同住宅建設
調査期間	20120610～20120914		担当者	屋山　洋	

藤崎遺跡19

—藤崎遺跡第37次調査報告—

福岡市埋蔵文化財調査報告書1240集



遺跡略号　FUJ-37
調査番号　1207

2014

福岡市教育委員会

本 文 目 次

Ⅰ.はじめに …… 1
Ⅱ.調査の記録…… 3
1.調査の経過…… 3
2.調査の概要…… 3
3.遺構と遺物 …… 5
1)甕棺…… 5
2)壺棺墓……24
3)石棺墓…… 24
4)方形周溝墓…… 24
5)溝…… 26
6)土坑…… 26
7)井戸…… 32
8)高取焼き関連遺構と遺物…… 35
9)その他の遺物…… 36
4.小結……36

挿 図 目 次

第1図　周辺遺跡分布図(1/25,000)…… 2
第2図　調査地点位置図(1/4,000)…… 2
第3図　調査区位置図(1/300)…… 3
第4図　調査区全体図(1/120)…… 4
第5図　ST004・010遺構実測図(1/20)…… 6
第6図　ST004・010遺物実測図(1/10)…… 7
第7図　ST013・014・017遺構実測図(1/20)…… 8
第8図　ST014・017遺物実測図(1/10・0008は1/4)…… 9
第9図　ST018・048・049遺構実測図(1/20)…… 12
第10図　ST013・018・048・049遺物実測図(ST018は1/10・0015は1/4・その他1/6)…… 13
第11図　ST032・094・095遺構実測図(1/20)…… 14
第12図　ST032・094・095遺物実測図(1/10)…… 15
第13図　ST099・104遺構・遺物実測図(1/20・1/6)…… 16
第14図　ST114遺構・遺物実測図(1/20・1/6)…… 17
第15図　ST120遺構・遺物、ST121・122遺物実測図(1/20・1/6・0034は1/10)…… 18
第16図　ST121・122・134遺構実測図(1/20)…… 19
第17図　ST135・142遺構実測図(1/20)…… 20
第18図　ST134・135・142遺物実測図(1/10)…… 21
第19図　SK062・SK084遺構・遺物実測図(1/20・1/30・1/4)…… 23
第20図　溝　遺構・遺物実測図(1/60・1/30・1/4・0052は1/2)…… 25
第21図　土坑実測図1(1/40)…… 27
第22図　土坑実測図2(1/40)…… 28
第23図　土坑実測図3(1/40)…… 29
第24図　井戸遺構実測図(1/60)…… 31
第25図　井戸出土遺物実測図(1/4)…… 32
第26図　西壁土層実測図…… 33
第27図　SK061出土遺物実測図(1/4)…… 33
第28図　その他の遺物実測図1(1/4)…… 34
第29図　その他の遺物実測図2(1/4)…… 35

図 版 目 次

図版1　1.Ⅰ区(東から)　2.Ⅱ区(東から)
図版2　1.Ⅲ区(北から)　2.Ⅳ区(西から)
図版3　1.Ⅰ区甕棺出土状況(東から)　2.ST004(西から)　3.ST004下甕(南から)
4. ST004人骨出土状況(南から)　5.ST010(東から)　6.ST010下甕(南から)
7. ST010下甕(東から)　8.Ⅲ区全景(西から)
図版4　1.ST013(北から)　2.ST013(西から)　3.ST014(南から)
4.ST014下甕(北から)　5.ST014人骨出土状況(北から)
図版5　1.ST017(北から)　2.ST017下甕(北から)　3.ST017人骨出土状況(南から)
4.ST018(北から)　5.ST018副葬小壺出土状況(西から)　6.ST018下甕(南から)
7.ST018人骨出土状況(北から)　8.ST032(南から)
図版6　1.ST048(左)・049(西から)　2.ST094(左).ST095(北から)　3.ST094(北から)
4.ST094下甕(北から)　5.ST095(西から)　6.ST095人骨出土状況(南から)
7.ST099(東から)　8.ST099下棺(東から)
図版7　1.ST104(西から)　2.ST104(東から)　3.ST114出土状況(東から)　4.ST114(東から)
5.ST114下掘方(東から)　6.ST120(東から)　7.ST120下(東から)　8.ST120下棺(東から)
図版8　1.ST121(奥側)ST122出土状況(西から)　2.ST121(西から)　3.ST122(西から)
4.ST134・135・142出土状況(西から)　5.ST134(南から)　6.ST135(南から)
7.ST135下甕(南から)　8.ST135人骨出土状況(南から)
図版9　1.ST142(南西から)　2.ST142掘方(南西から)　3.SK062(東から)　4.ST062(西から)
5.SK084(東から)　6.SD029(北から)　7.SD029土層(東から)　8.SD029遺物出土状況
図版10　1.SD019東壁土層(西から)　2.SD019西壁土層(東から)　3.SD071(東から)　4.SD075(東から)
5.SD075土層(西から)　6.SK061(南から)　7.SK070(南から)　8.SK109(西から)
図版11　1.SK038(東から)　2.SK041(東から)　3.SK111(北東から)　4.SK112土層(南東から)
5.SK117(東から)　6.SK118土層(南東から)　7.SK119(北から)　8.SK156土層(西から)
図版12　1.Ⅱ区西壁土層(東から)　2.Ⅱ区南側(東から)　3.SE001(西から)
4.SE001井筒(北から)　5.SE002(東から)

Ⅰ．はじめに

１．調査に至る経過

平成 24 年 (2012 年) ３月 21 日付けで福岡市教育委員会埋蔵文化財第 1 課（現 埋蔵文化財審査課）に早良区藤崎 1 丁目９番の共同住宅建設に伴う埋蔵文化財事前審査申請書 (23-2-1127) が提出された。申請地は周知の埋蔵文化財包蔵地である藤崎遺跡の中に位置し、周囲でも多くの地点で発掘調査が行われていることから埋蔵文化財第 1 課では建設に先立って埋蔵文化財の発掘調査を行い記録保存を図ることが必要であると判断して協議を行った。その結果平成 24 年 6 月 11 日から 9 月 14 日の期間で発掘調査を行った。

調査期間中は休憩所や水道の設置など原因者及び関係者各位の多大なご協力を頂いた。記して感謝したい。

２．調査の組織

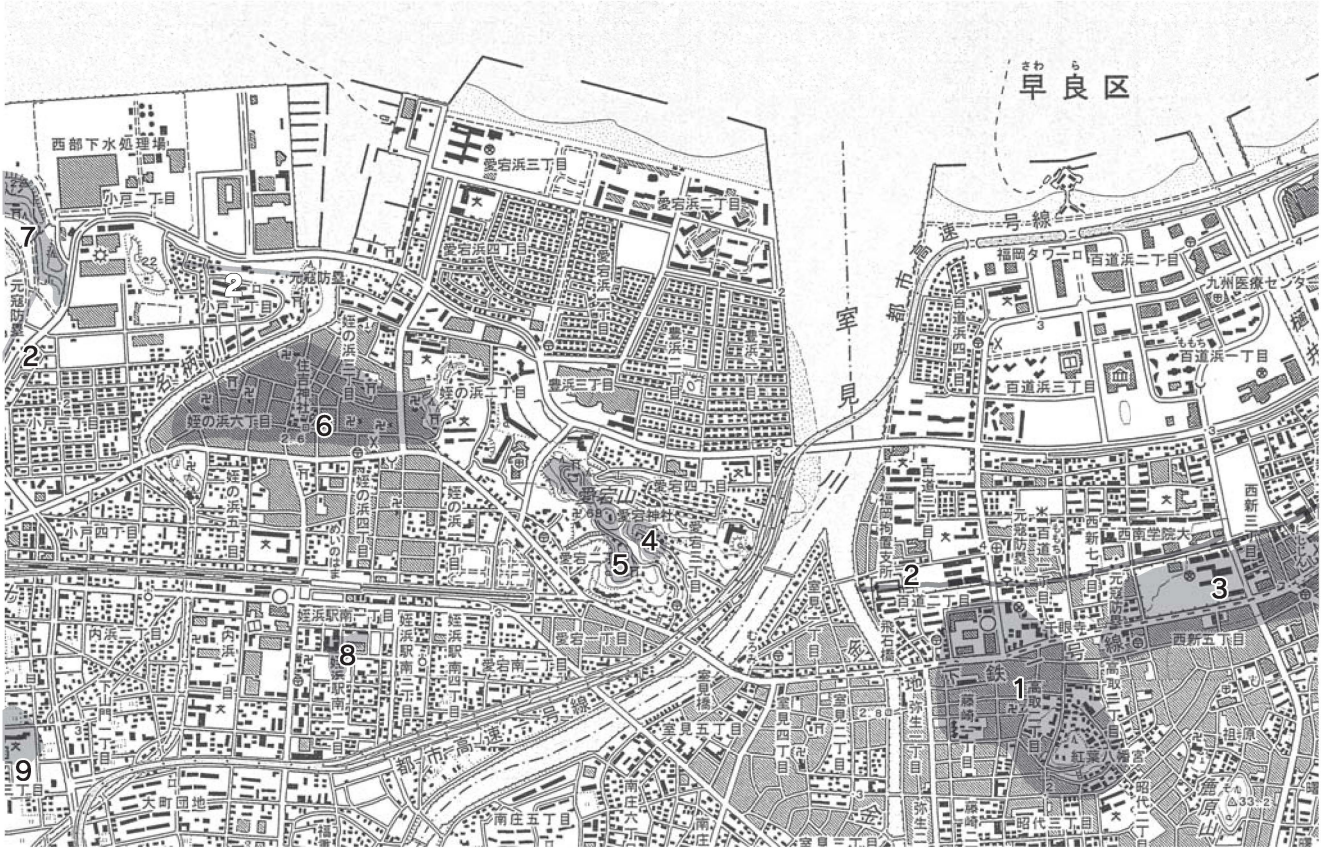
調査主体　福岡市教育委員会 (発掘調査　平成 24 年度　：整理報告　平成 25 年度)
調査統括　　経済観光文化局文化財部埋蔵文化財調査課　課長　宮井善朗
同課調査第 1 係長　　常松幹雄 (発掘調査)
同課調査第 2 係長　　榎本義嗣 (整理報告)
庶務　埋蔵文化財審査課管理係　　川村啓子
調査担当　埋蔵文化財調査課　　屋山　洋

作業員　田中昭子　山田ヤス子　高橋茂子　真田功二　岡部安正　芹川淳子　河原明子　三角チエ子
三角章夫　中村健三　竹内武俊　安東昌信　小田義之　安部みゆき　内野信代　篠原俊夫
宮原豊　大坂布由子　樋口知則　井上稔子　河野隆章　浦伸英　中村桂子　吹春憲治
梶原慎司
整理作業　坂口龍子

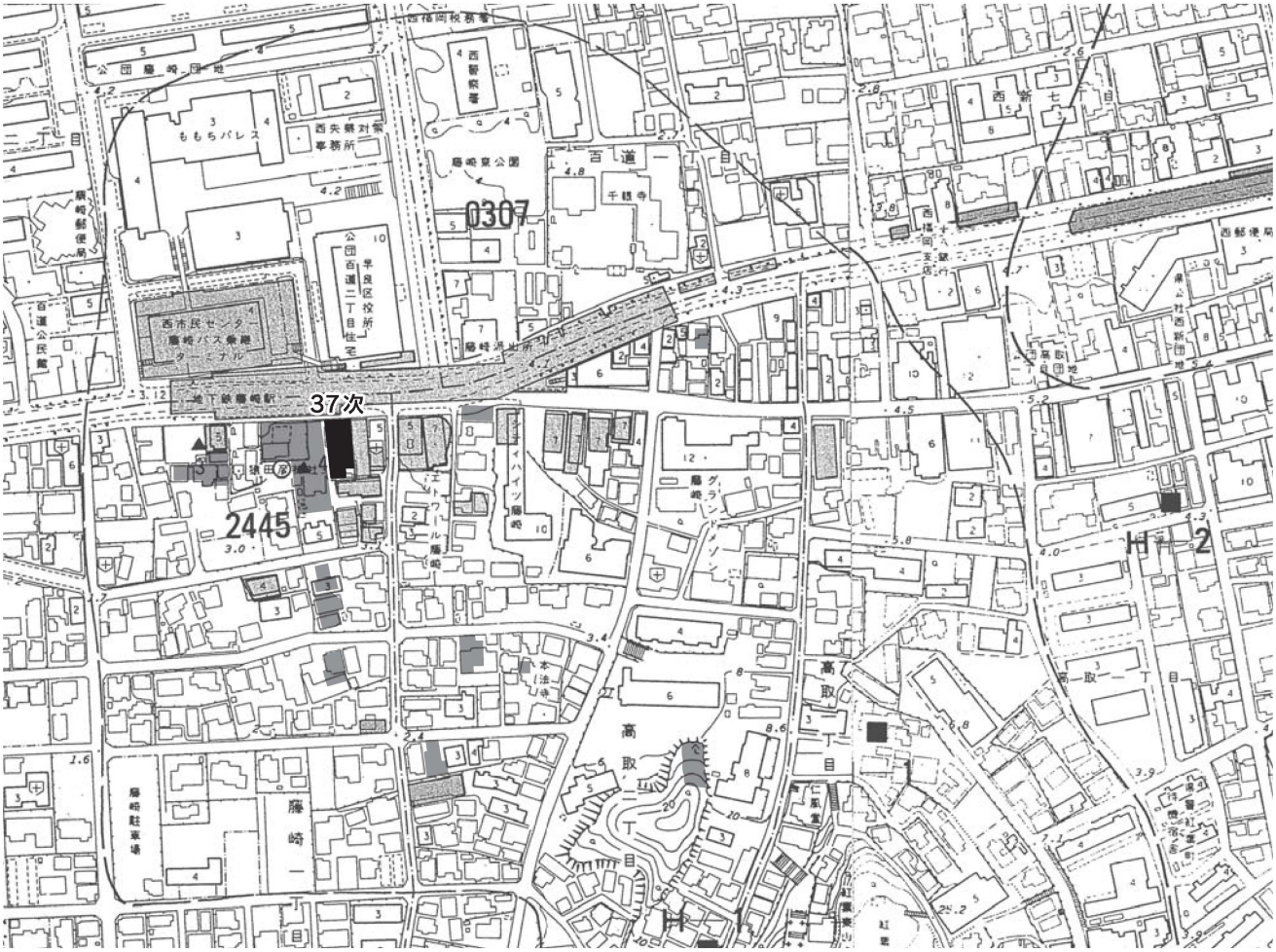
３．遺跡の立地と環境

藤崎遺跡は博多湾に面し、西公園から祖原･皿山、西区の愛宕山の間に形成された砂丘上に位置する。砂丘は現在樋井川によって東西に分断されるが、東側は江戸時代に城下町として整備され、近代以降の開発も早かったため、現在では近世も含めて遺構はほとんど確認できない状態である。西側も近代以降開発が進んだが、西新町遺跡、藤崎遺跡では弥生時代以降の遺構が数多く確認されている。
藤崎遺跡は東西 400m、南北 650mの範囲に広がる弥生時代から中世を中心とした遺跡で南東側に位置する皿山以外は砂丘上に位置する。この砂丘には海岸線に沿った東西方向の 2 列の微高地が 300m 離れて並行し、北側のＡ微高地上には元寇防塁が築かれる。南側の微高地Ｂでは尾根を中心に甕棺墓群と方形周溝墓群が形成される。甕棺墓群は微高地 B の西端に近い現猿田彦神社付近に最も古い弥生時代前期の甕棺墓域が形成され、中期には微高地の尾根に沿って東側に延び、東西 200m、南北 50mの範囲に広がる。方形周溝墓群もほぼ同範囲に広がっていて現在 16 基程が存在すると推定され、そのうち 3 次調査の 6 号･7 号方形周溝墓と 4 次調査の 10 号方形周溝墓の 3 基から青銅鏡が出土し、その他に 27 次調査地点で大正 6 年に石棺墓から出土した 1 枚と 32 次調査地点から明治 45 年に箱式石棺から出土した 1 枚を加え 5 枚の青銅鏡が出土している。弥生時代後期以降は微高地 B の南側緩斜面に竪穴式住居や掘立柱建物による集落が形成され中世まで続く。13 世紀後半には唐津街道に

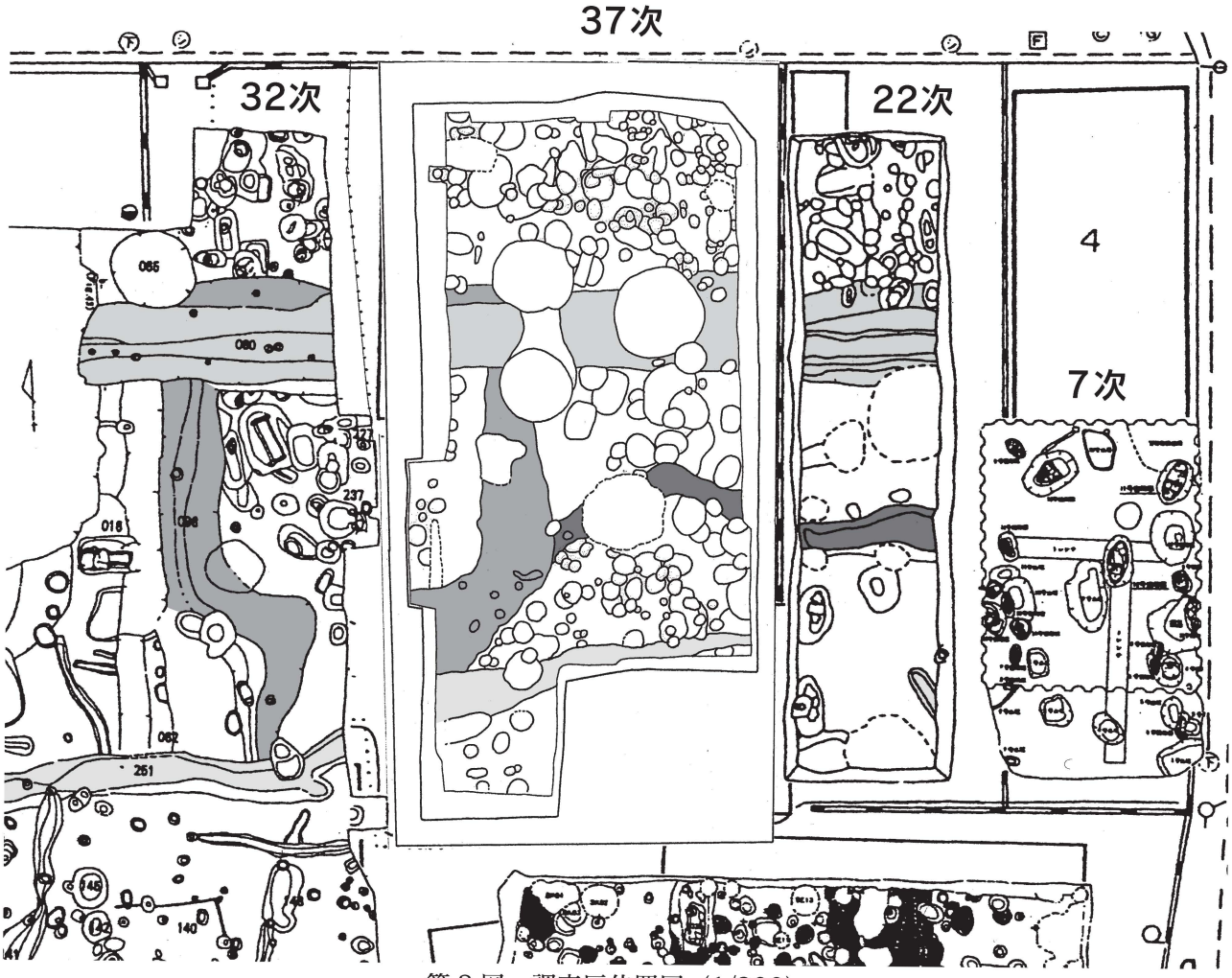
※文化財部は平成 24 年 4 月 1 日付で教育委員会から経済観光文化局へ移管した。



第 1 図　周辺遺跡分布図（1/2500）



第 2 図　調査地点位置図（1/4000）



第３図　調査区位置図（1/300）

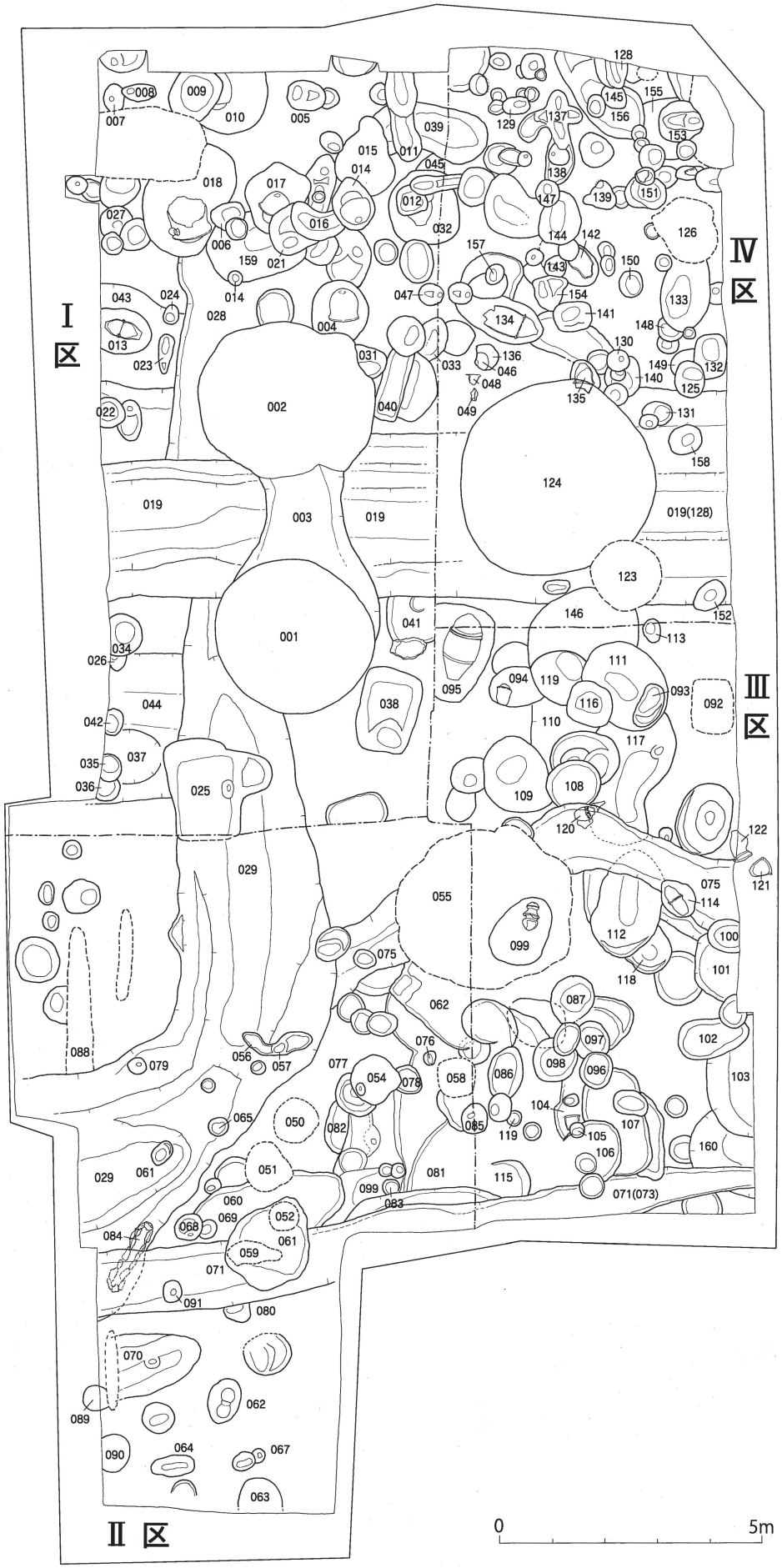
Ⅱ．調査の記録

１．調査の経過

申請地の敷地面積は 502㎡、発掘調査はそのうち建物による破壊を受けない南東隅以外の全面に及ぶ。調査時には崩落防止のために境界から幅 1.2m程の残地を設定して掘り下げを行った。調査時には現地表から深さ 60㎝の近現代盛土を重機で掘り下げたが、土量が多く置き場が確保できないため、調査区をⅠ～Ⅳ区に４分割して調査を行うこととした。調査は６月 11 日に機材の搬入、12 日にⅠ区の表土剥ぎを行い調査を開始した。７ 月 ９ 日にⅠ区の全景写真の撮影を行ってⅠ区の調査を終え、７月 11～12 日にⅡ区の表土剥ぎを行い、７月 17 日からⅡ区の調査を開始した。その後８月３日から 17 日までⅢ区、８月 18 日から９月４日までⅣ区の調査を行い、９月５日にⅣ区の埋め戻しを行い調査が終了。９月７日に機材の搬出を行い、その後 14 日まで整理室で土器洗いを行った。

２．調査の概要

調査区の北半で弥生時代前期末から中期前半の甕棺墓が 20 基出土した。甕棺は大型の専用棺が 12 基を数える。そのうち ST018 から小壺が出土した以外に副葬品は出土しなかった。人骨は ST004・018・095・134・135 の 5 基から出土したが全体的に遺存状態は悪く、埋葬姿勢が分かるものは ST004 と 095 の 2 基のみである。土坑は数多く出土したが、甕棺に切られる土坑を数基確認した(SK112･159)。いずれも土器は細片のみの出土で時期は確定できないが、甕棺墓群形成以前に何らかの遺構が存在したことが判明した。土坑は大型で土壙墓の可能性も考えられる。溝は SD075(弥生時代中期) と SD029(方形周溝墓) と SD019(13 世紀後半)、SD071(近世～近代) の４条を確認した。



第４図　調査区全体図(1/120)

このうち方形周溝墓のSD029を除く３条は等高線に沿う。SD075は東側22次調査でも出土しており、本調査区で弥生時代中期の甕棺に切られ、弥生時代中期以前まで遡ることが判明した。方形周溝墓のSD029 は底面に石棺墓１基を伴う。井戸は４基出土し３基は近代、１基は現代である。地表面から40㎝下で調査区全体に広がる整地層を確認した。近代の高取焼きの窯に伴う作業面と考えらる。

３．遺構と遺物

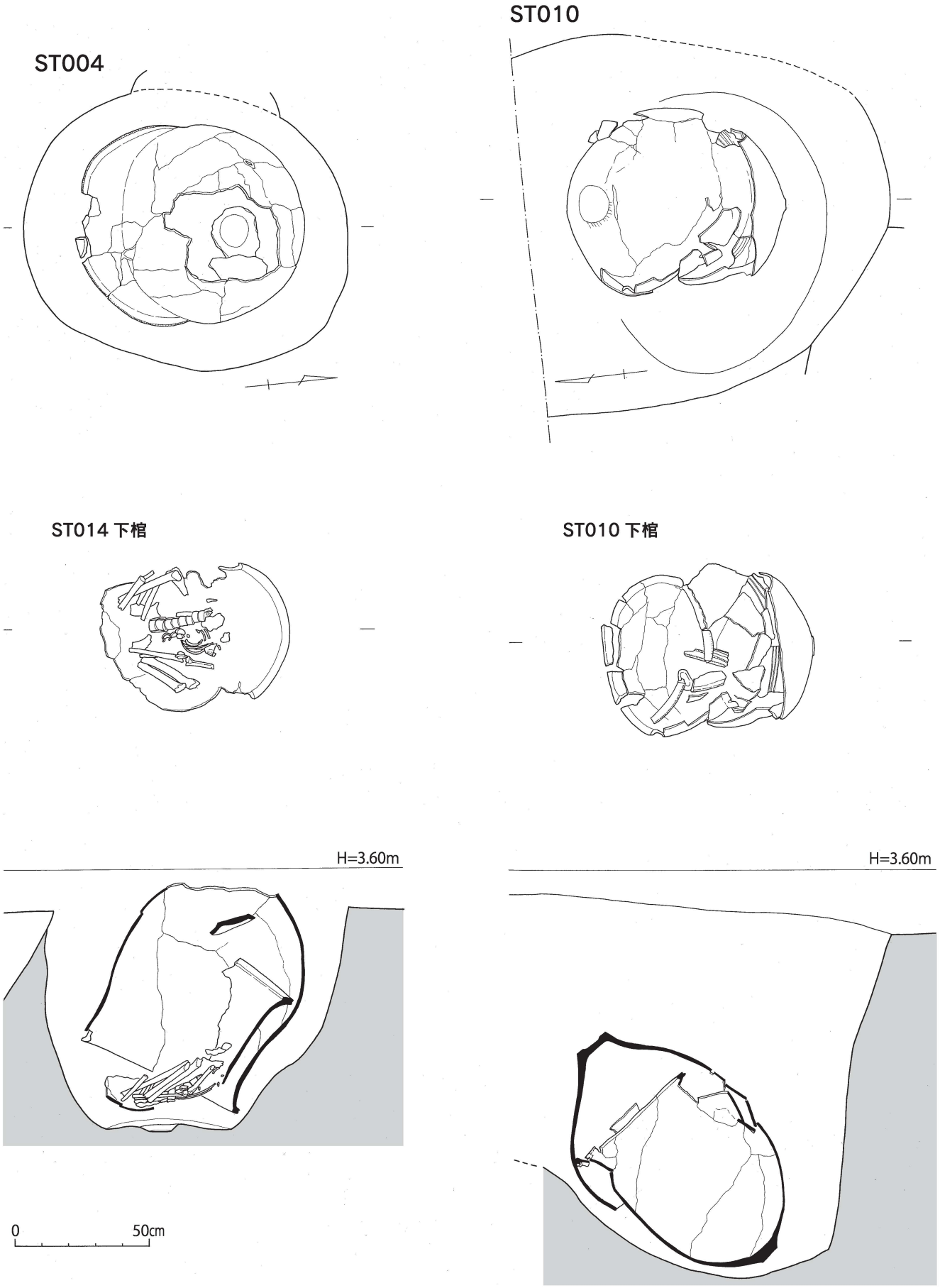
1) 甕棺

ST004(第５図) 調査区の北側に位置し、SE002 に切られる。墓壙掘方は楕円形を呈し、長径 123㎝、短径 101㎝、深さ 80 ㎝を測る。断面はいびつな逆台形を呈し、底面中央に径 14 ㎝、深さ 3 ㎝の掘り込みがみられる。棺は主軸を N-5°-E にとる複棺で埋置角度は 51°を測る。上甕は底部が破損し、棺内側に落ち込んでいた。上甕のほぼ全体が遺存するのに対し、下甕は下面側のみの遺存である。上甕に覆われており後世に削平されたとは考えられないため、遺体が乗る部分を残して打ち欠いたと考えられる。最下部より若干上側に穿孔を施す。人骨は頭骨は小片のみで歯は抜け落ちている。椎骨は良好に遺存していたが上側の数個は落ちている。肋骨は左側の数本が遺存していた他、胸骨も遺存していた。上腕骨は左右とも遠位部のみの遺存で橈骨は両端を欠く。大腿骨と脛骨も左右遺存していたが、いずれも両端部は欠損していた。寛骨も遺存状態は悪い。頭位は北を向く。第 6 図 0001 は上棺である。大型の甕で口径 71 ㎝、器高 83 ㎝を測る。色調は淡黄褐色であるが、一部に黒色顔料が残る。調整は外面は底部以外に板による縦ナデを施す。口縁部は横ナデ、内面は板による横ナデである。0002 は下棺である。底部は遺存しない。大型の甕で復元口径 65.6 ㎝、遺存高 75.5 ㎝を測る。色調は黄褐色に赤橙色、暗灰色が斑に入る。胎土は白色砂を多く含む他、赤･黄･黒色の粒を含む。調整は外面が口縁端から胴部までがミガキで、口縁下の横方向の細かなミガキ、その下肩部の縦方向の粗いミガキ、胴部中有の斜め方向のミガキに分かれる。胴部下半は板によるナデで、その下はハケ目を施す。内面は口縁下が横方向のハケ目でその他は板を使用したナデを施す。

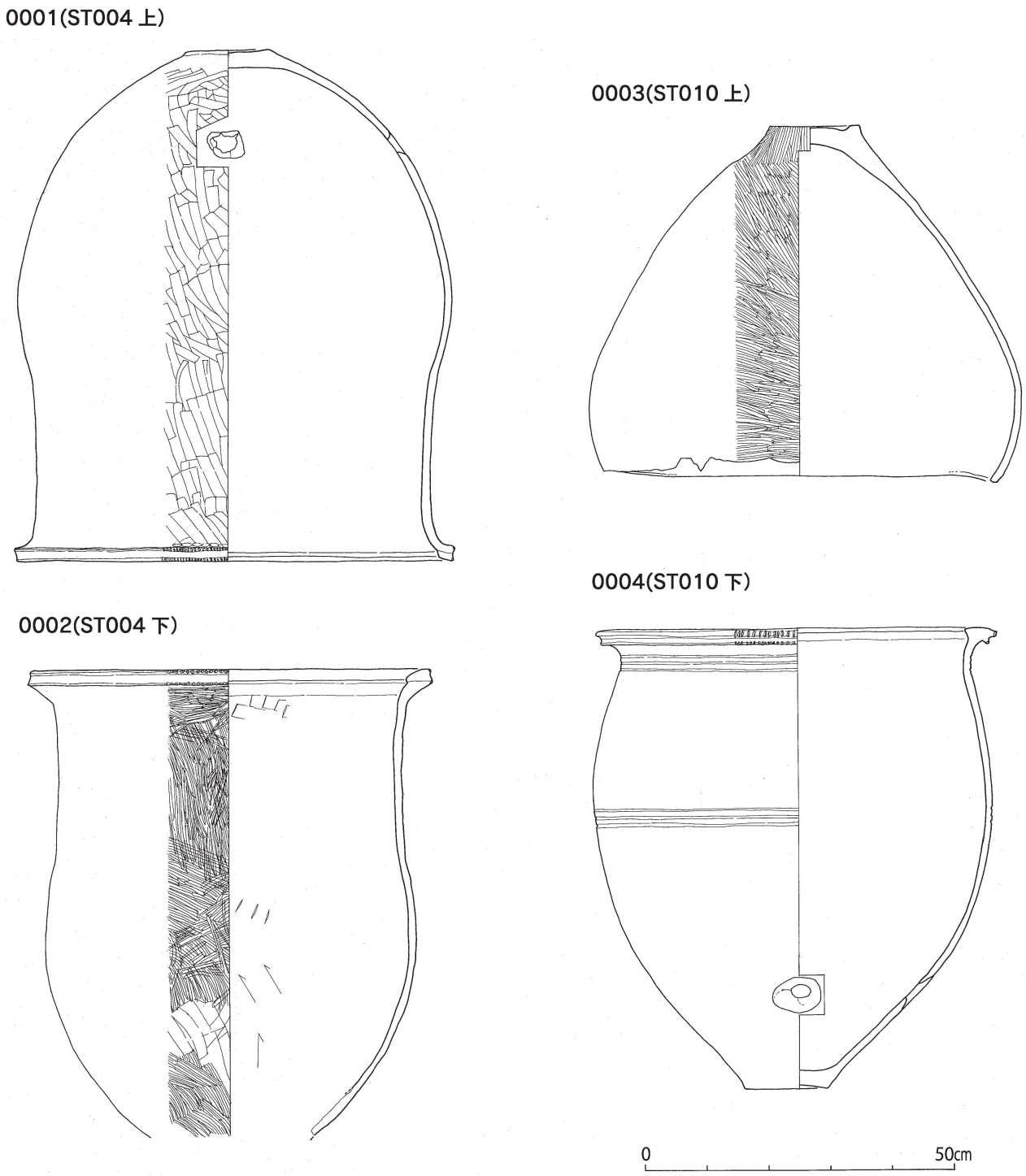
ST010(第５図) 調査区北西隅に位置する。墓壙掘方の北側が調査区外に延びるが南北に長い楕円形と推定される。現状で南北 1.3ｍ、東西 139 ㎝、深さ 140 ㎝を測る。棺は主軸を N-5°-E にとる複棺で埋置角度は 48°を測る。上棺は土圧のため大きく破損し、端部が下棺胴部に食い込んでおり、下棺も上棺に押されて上面の胴部上半が破損していた。第 6 図 0003 は上棺である。大型壺の肩部から上を打ち欠く。色調は淡赤褐色で、黒斑が点在する。調整は外面がミガキで底部直上はハケ目、内面は全体にナデを施す。0004 は下棺である。大型の甕で口径 64.8 ㎝、器高 74.8 ㎝を測る。色調は赤橙褐色で全体に濃淡の斑がある。頸部と同部中央に３条の沈線を施す。調整は内外面全体にナデを施す。

ST013(第７図) 調査区の北西側に位置する。墓壙掘方は東西に長い楕円形で西端が調査区外に延びる。調査区内で東西 116 ㎝、南北 87 ㎝、深さ 35 ㎝を測る。棺は主軸を N-70°-W にとる複棺で埋置角度は 21°を測る。上下棺とも胴部から口縁にかけて削平されている。第 10 図 0011 は上棺である。小型甕で口径 35.7㎝、器高 38.3 ㎝を測る。色調は黄褐色で径 10 ㎝程の黒斑がある。胎土は白色砂と雲母片を含む。調整は外面が縦ハケ、口縁から内面全面はナデを施す。0012 は下棺である。小型甕で口径 32.5㎝、器高 38.1 ㎝を測る。色調は淡褐～淡黄褐色を呈し、胎土は白色砂を多く含み、その他に黒褐色と赤褐色の粒を含む。調整は外面が縦ハケ、口縁が横ナデ、内面は指オサエ後工具を使用したナデを施す。

ST014(第７図) 調査区の北側寄りに位置する。墓壙掘方は南北に長いいびつな楕円形を呈し、長径 101㎝、短径 79 ㎝、深さ 88 ㎝を測る。断面は逆台形を呈し、底面は南側が若干低くなっている。棺は主軸を N-13°-W にとる複棺で埋置角度は 56°を測る。上棺の西側には壺の肩部の破片 (0007) を

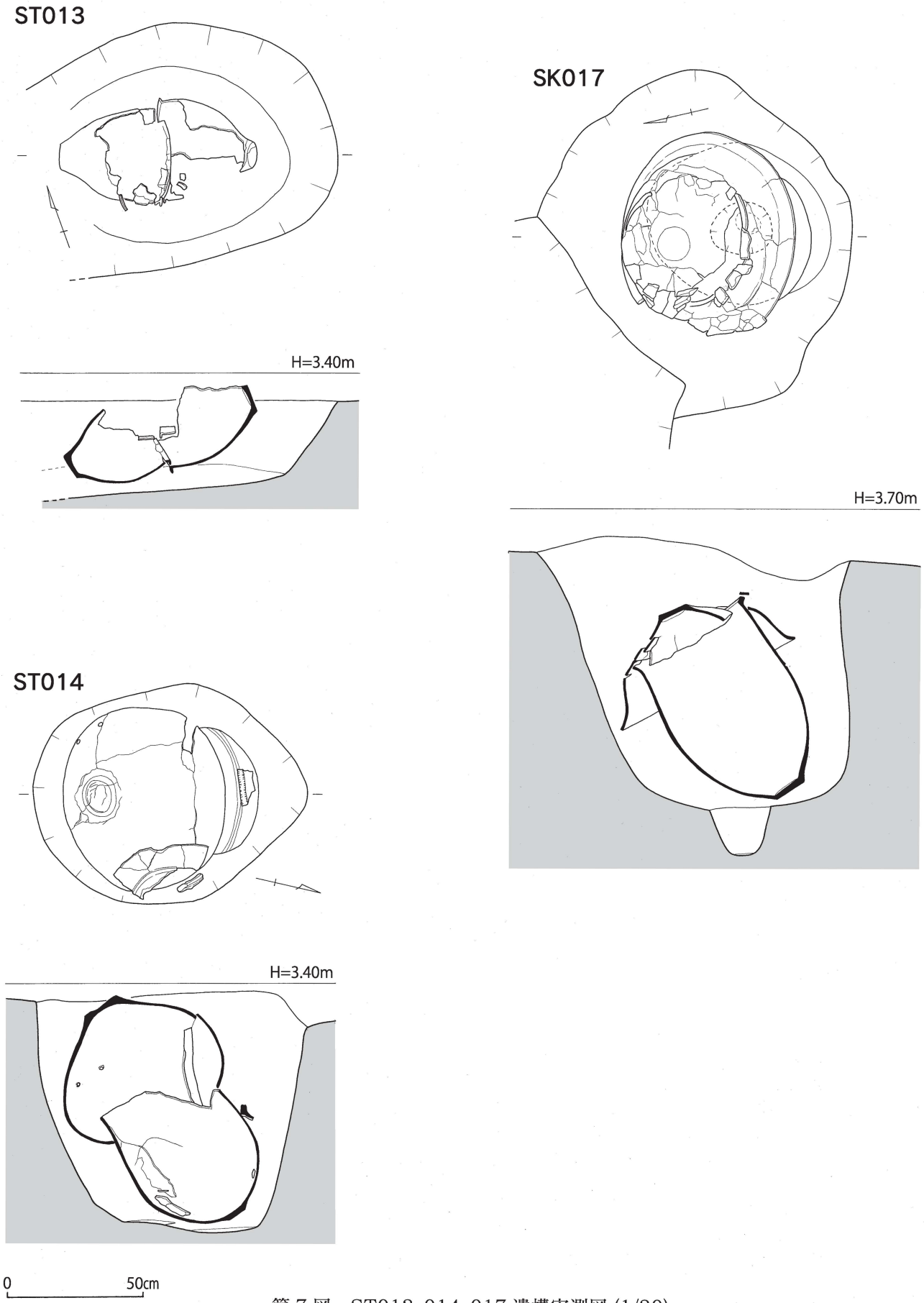


第 5 図　ST004･010 遺構実測図 (1/20)

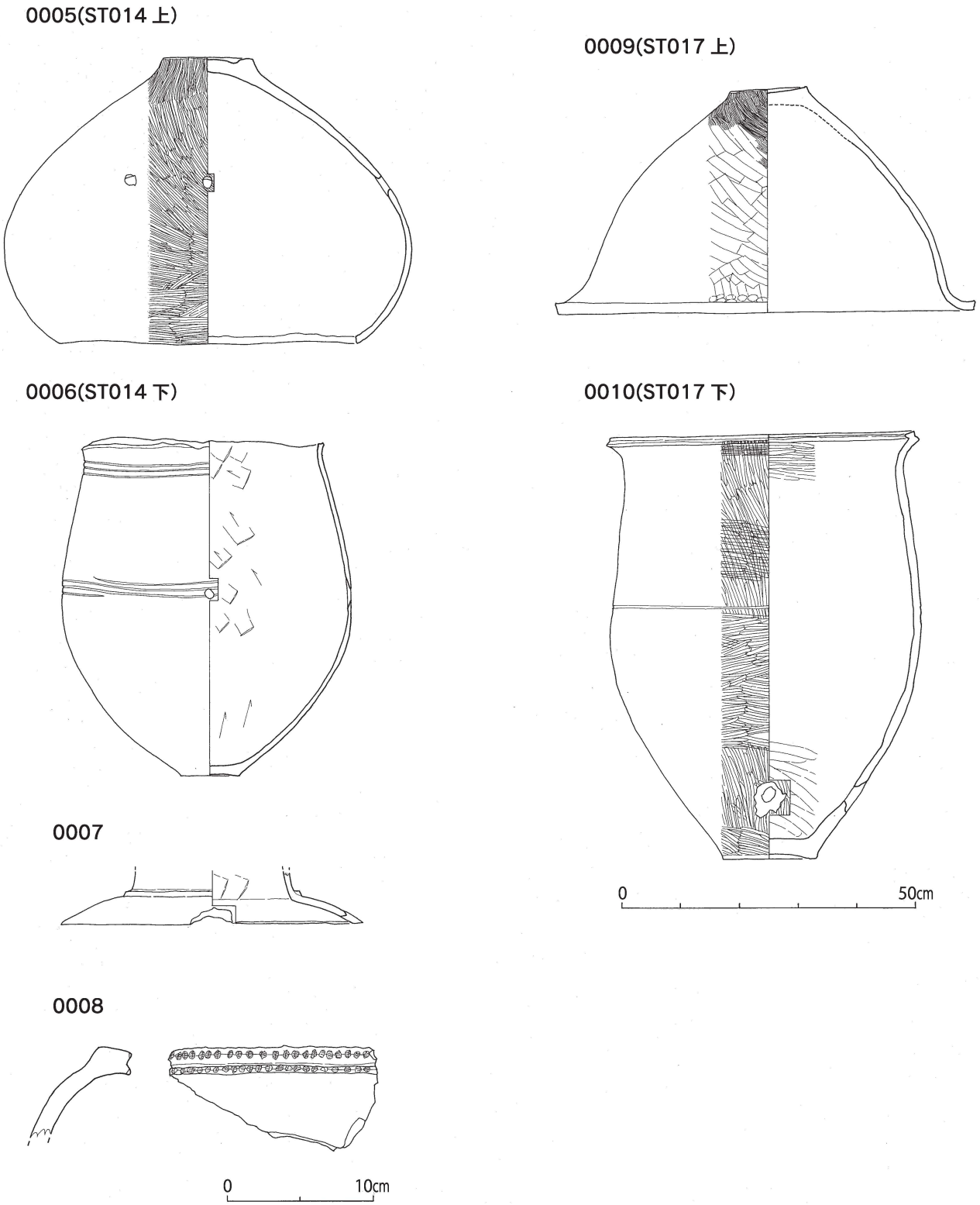


第６図　ST004･010 遺物実測図 (1/10)

おいて棺がズレないように固定している。上棺は胴部下半のほぼ同じ高さに 13 ㎝離れて 2 カ所の穿孔あり。下棺は底部から 10 ㎝上の接地側に大きな穿孔とその上側に径 1.5 ㎝の小さな穿孔がある。また底部から30 ㎝上の上面側にも穿孔があり、打ち欠いた口縁を孔の上に置き、砂が入らないようにしている。出土物(第８図0005～0008)。0005 は上棺である。大型の広口壺の肩部から上を打ち欠く。遺存高 48.7㎝、最大胴径 69.3 ㎝を測る。色調は赤橙褐色で濃淡の斑があり、胎土は白色砂を多く含む。調整は外面はミガキで底部直上はハケ目を施す。内面は全面にナデを施す。0006 は下棺である。大型の甕で口縁部を打ち欠く。最大胴径 49.1 ㎝、遺存高 57.5 ㎝を測る。色調は淡褐色を基調とし濃淡で斑状を呈す。頸部と胴部に 3 条の沈線を施すが、胴部の沈線は 1 本の沈線を螺旋状にして 3 条にみせている。調整は内外面とも丁寧なナデで胴部沈線上に穿孔を施す。0007 は 0005 の肩部である。



第７図　ST013･014･017 遺構実測図 (1/20)



第 8 図　ST014･017 遺物実測図 (1/10･0008 は 1/4)

0005 から打ち欠いて上棺がズレないように墓壙掘方との隙間に挟んでいた。頸部下端に突帯がつく。0008 は 0006 の口縁である。0006 から打ち欠き、0006の胴部上面の穿孔の上に置いて砂の侵入を防いでいた。

ST017（第 7 図） 調査区の北西隅に位置する。墓壙掘方はいびつな円形を呈し、南東側を 016 に切られる。東西 126 ㎝、南北 115 ㎝、深さ 101 ㎝を測る。底面中央に径 23 ㎝、深さ 18 ㎝の柱穴状掘り込みがある。棺は主軸を N-13°-E にとる複棺で埋置角度は 57° を測る。上棺は土圧で破損し下棺の中に一部が落ち込む。人骨は底面から 5 ㎝程浮いた状態で四肢骨片と思われる骨の小片が 3 点出土した。第8図0009は上棺である。大型の鉢で口径71.1㎝、器高38.7㎝を測る。色調は淡黄褐色を呈す。胎土に白色砂を多く含む他、赤褐色粒、黒色粒を含む。調整は外面が斜め方向のナデと底部直上はハケ目を施し、内面は全面ナデを施す。0010は下棺である。大型甕で口径48～53㎝、器高72.8㎝を測る。色調は赤橙褐色を呈し、胎土は 2～3 ㎜の白色砂を多く含む。胴部中位に大きな黒斑がある。胴部中央に沈線を 1 条巡らす。外面の調整はミガキで、口縁下から底部直上まで方向を変えている。内面は口縁下が横方向のミガキの他はナデを施す。底部から 11 ㎝上に内面からの穿孔を施す。

ST018（第 9 図） 調査区北西隅に位置する。墓壙掘方はいびつな隅丸長方形を呈し、北西隅を撹乱に切られる。長径 212 ㎝、短径 160 ㎝を測る。底面は検出面から約 50 ㎝の深さにテラス状の平坦面が広がり、南端部に径 90 ㎝、深さ深さ 40 ㎝程掘り下げて下棺を据えている。下棺の下には径 22 ㎝、深さ 35 ㎝の柱穴状の掘り込みがある。柱穴状掘り込みの埋土は茶褐色砂で遺物は出土していない。テラス中央部分にも柱穴状の掘り込みが見られるが、これは後世の遺構である。棺は主軸を N-17°-W にとる複棺で埋置角度は 49° を測る。上棺西側に接して壺が出土した。第 10 図 0013 は上棺である。大型の甕で底部は削平されている。口径 69 ㎝、遺存高 61.2 ㎝を測る。色調は黄褐色で、胎土中に 2～3 ㎜の白色砂を多く含む。調整は口縁部が横ナデで、外面は方向を変えながらミガキを施す。内面は上半が横方向のミガキ、下半はナデを施す。0014 は下棺である。中型の甕で口径 54 ㎝、器高 60.5 ㎝を測る。色調は褐色で全体が濃淡の斑である。胴部中央に径 20 ㎝の黒斑がある。調整は口縁部が横ナデで、外面は縦ハケ、内面は口縁下の一部が強いナデで、その他は板状工具による斜め方向のナデを施す。胴部下半に穿孔があり、埋置した時に穿孔部分がもっとも低くなり、掘方底面の柱穴状掘り込みの上に来るようにしている。0015 は副葬小壺である。口径 10.2 ㎝、器高 17.8 ㎝を測る。色調は本来明褐色だが黒く塗られた痕跡がのこり暗褐色を呈している。胴部最大径の少し下に黒斑がある。調整は外面頸部が縦方向のミガキでそれ以外は横方向のミガキを施す。胴部下位に穿孔を施す。

ST032（第 11 図） 調査区北側に位置する。埋土が地山の黄白色砂とほぼ同じで墓壙掘方は不明である。棺は主軸を N-5°-W にとる大型棺の複棺で埋置角度は 45° 前後である。下棺は焼成不良で軟質なため出土時には土圧で胴部下半が大きく破損していた。人骨は残っていない。第 12 図の 0018 は上棺である。大型の広口壺で肩部から上を打ち欠く。最大胴径 67 ㎝、残存高 40.5㎝を測る。色調は淡赤褐色～明赤褐色を呈し、外面は黒色顔料を塗布していたと思われる。胎土は 2～3 ㎜の白色砂を多く含む。調整は内外面とも板状工具による斜め方向のナデを施す。0019 は下棺である。大型の甕で口縁を打ち欠く。底部は遺存しない。打欠いたのか、軟質で細片化したのかは不明である。頸部径 55.4 ㎝、遺存高 65.6 ㎝を測る。頸部と胴部に 3 条の沈線を巡らし、その間を 4 条の沈線を単位として 8 ヶ所に施す。沈線は胴部、縦線、頸部の順に描いている。色調は淡赤～赤褐色を呈し、胎土に 5 ㎜以下の白色砂を多く含む。調整は外面が摩滅のため不明瞭だがミガキと思われる。内面はナデを施す。

ST048（第 9 図） 調査区の北側に位置する。墓壙掘方は不明である。横倒しにした小型甕の下半のみが出土しており、甕棺墓と思われる。棺は主軸を N-12°-E にとる単棺で埋置角度は 17° 前後である。

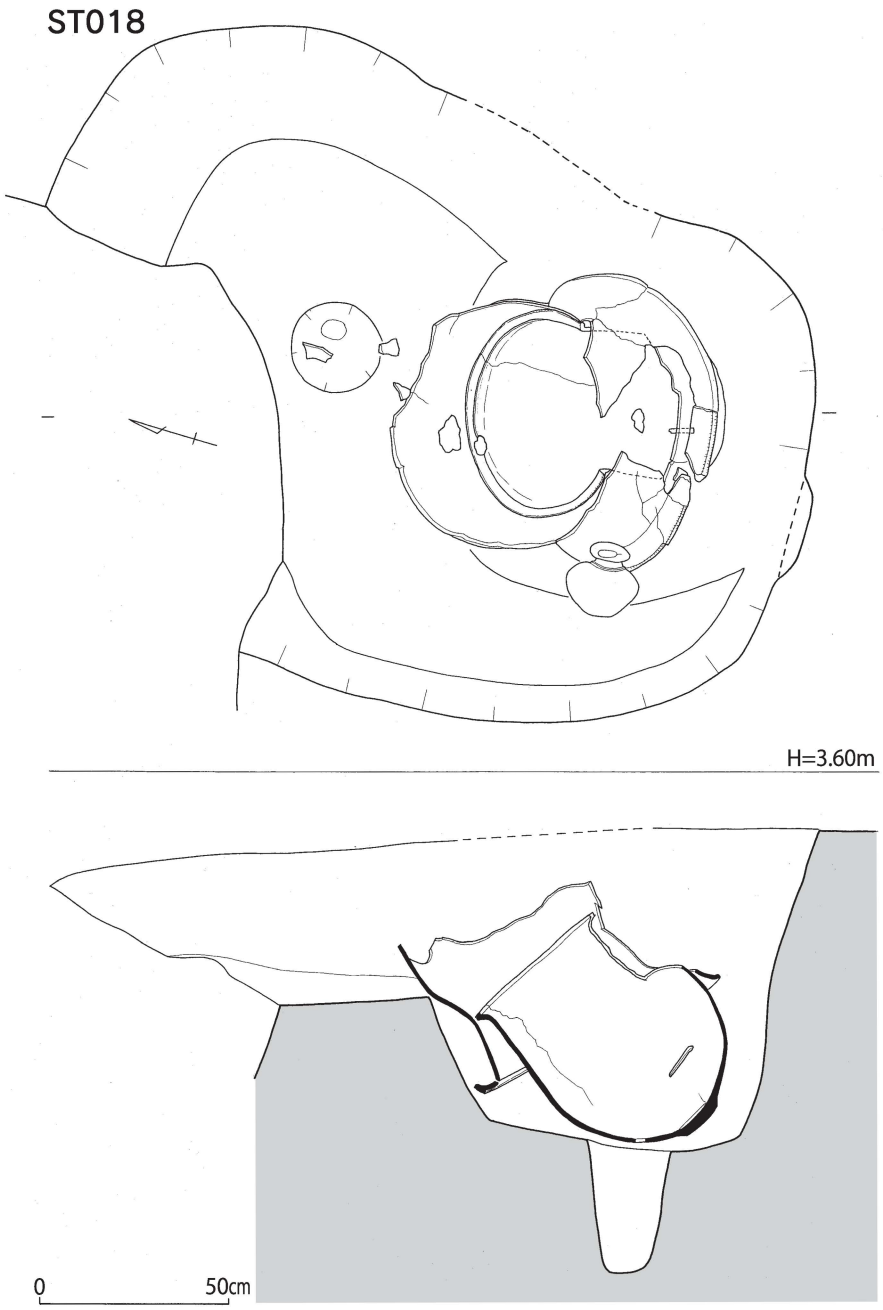
第 10 図 0016 は復元口径 21.8 ㎝、遺存高 18 ㎝を測る。色調は淡黄褐色で胎土に細かな白色砂を多く含む。調整は外面が縦方向のナデで、粘土帯接合部に一部指オサエの痕跡が残る。内面は指オサエの後軽く斜め方向のナデを施す。

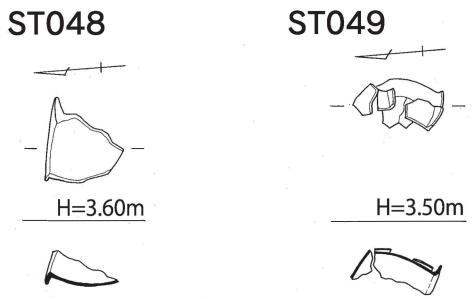
ST049（第９図） ST048 の南隣に位置する。墓壙掘方は不明である。半裁した小型甕を俯せ、破片の一部を上に重ね置いている。遺体の上に甕を被せたものと思われる。棺は主軸を N-26°-E にとる単棺である。第 10 図の 0017 は復元口径 21.4 ㎝、遺存高 17.3 ㎝を測る。色調は黄褐色を呈し、胎土には白色砂を多く含み、赤褐色粒と黒色粒も含む。調整は外面がハケ、内面がナデ、口縁が横ナデである。

ST094（第 11 図） 調査区中央に位置する。上棺は底部に削平を受けている。墓壙掘方は南北に長い楕円形で長径 126 ㎝、短径 71㎝、深さ 58 ㎝を測る。断面は南側にテラスをつけ埋置角度を調整している。棺は主軸を N-18°-E にとる大型棺の複棺で埋置角度は 42°を測る。上下棺とも胴部下半に穿孔が見られる。人骨は遺存していない。第 12 図 0020 は上棺である。大型の甕で口縁を打欠く。頸部径 36㎝、遺存高 52.7 ㎝を測る。頸部に 3 条の沈線を巡らす。色調は淡褐色～黄褐色を呈し、胴部下半の 2 ヶ所に黒斑がある。調整は外面は縦ハケ後粗いミガキ、内面は頸部が連続した指オサエで胴部はナデを施す。0021 は中型の甕で口縁に貝殻による刻目を施し、頸部に 3 条の沈線を巡らす。底部は上底である。口径 32.5㎝、器高 39.2 ㎝を測り、色調は赤橙褐色で胎土に 2 ㎜程の白色砂を多く含む。沈線下の対角線上の 2 点に 10～15㎝程の黒斑がある。調整は外面が沈線から上は横方向の細かなミガキ、下はハケ後縦及び斜めのミガキを施す。内面は沈線より下が指オサエ後板によるナデ、上は長めの指オサエ後に板状工具による軽い横ナデを施す。外底部は外周に沿ってナデを施す。

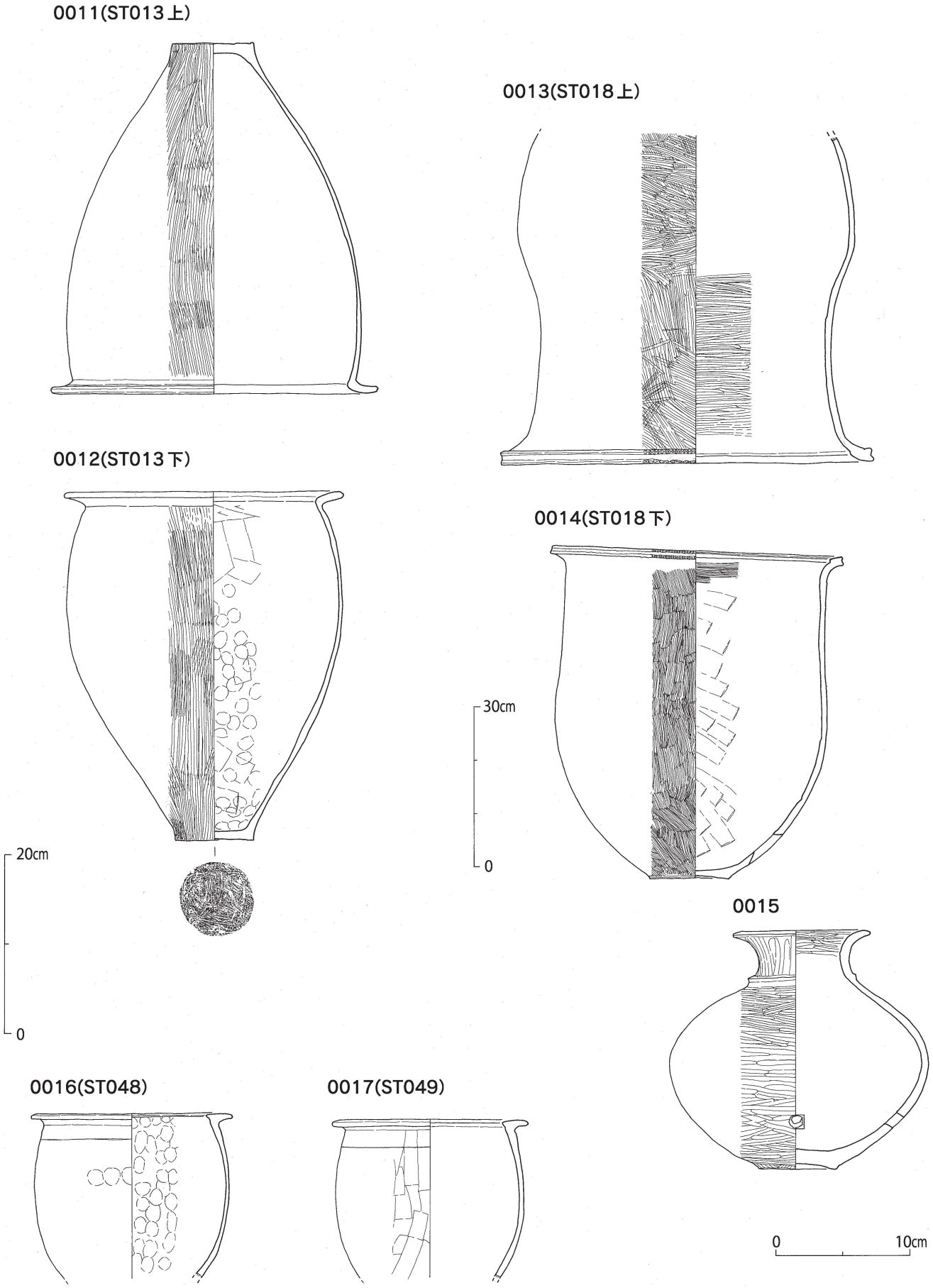
ST095（第 11 図） 調査区中央に位置する。墓壙掘方は南北に長い楕円形を呈すると思われるが、西縁部は不明瞭である。長径 191㎝、深さ 72 ㎝を測る。断面は逆台形を呈す。棺は主軸を N-27°-E にとる大型棺の複棺で埋置角度は 15°を測る。人骨は頭骨と下顎骨が若干ズレた状態で出土した他、左右の大腿骨、脛骨、あと上肢の一部が遺存する。いずれも遺存状態は悪く、頭蓋骨は右側頭頂骨が大きく欠損し、左右の大腿骨と脛骨も両端部が欠損している。椎骨や肋骨は遺存していなかった。第 12 図の 0022 は上棺である。大型の鉢で口径 57.4 ㎝、器高 44.6 ㎝を測る。色調は淡褐色で部分的に赤･黄色を帯びて斑状である。胎土は白色砂を多く含む他、赤褐色粒と黒色粒を含む。調整は外面は全体がナデで底部頂上のみハケ目が残る。内面はナデで指オサエの痕が残る。0023 は下棺で大型の甕である。口縁下に 1 条、胴部に 2 条の突帯を巡らす。口径 60.6㎝、器高 92.7 ㎝を測る。色調は淡黄褐色で口縁突帯下に 30 ㎝、反対側に 60 ㎝の黒斑がある。胎土は白色砂を多く含む他黒･黄･褐色粒を含む。調整は外面が胴部突帯の 5 ㎝下から口縁までが横ナデ、下が縦ナデで、底部上にハケ目が残る。内面はナデで口縁下に指オサエの痕跡が残る。

ST099（第 13 図） 調査区中央からやや南東側に位置する。近代の攪乱 SK055 に囲まれている。SK055 を掘り下げた際に ST099 に気づき、それ以上壊さず残したと思われる。墓壙掘方は攪乱底面に痕跡状に残り平面は楕円形で長径で 1m 弱と推定される。棺は主軸を N-13°-E にとる小型壺の複棺で埋置角度は 18°を測る。第 13 図 0024 は上棺である。広口壺で口径 33.0 ㎝、遺存高 31.8 ㎝を測る。外面は内外面とも丹塗りである。外面は頸部から口縁は幅 4.5㎝程の縦方向のミガキを暗文状に 6ヶ所施し、胴部上半は横方向のミガキ、胴部下端は縦方向のミガキを施す。内面は頸部から上は横方向のミガキ、胴部はヘラナデを施す。胎土は濃灰色～橙褐色を呈し、白色砂を多量に含む。0025 は下棺である。広口壺で口径 36.8 ㎝、器高 33.4 ㎝を測る。底面を除く外面全面と内面は頸部から上が丹塗りである。胴部最大径部に M 字形の突帯が 1 条付く。外面は頸部から上に縦方向に暗文状のミガキを施し、胴部上半は横方向の細かなミガキ、胴部下端は縦方向のミガキを施す。内面は頸部から上に横方向の細かなミガキ、胴部はナデを施す。胎土に白色細砂を含む。

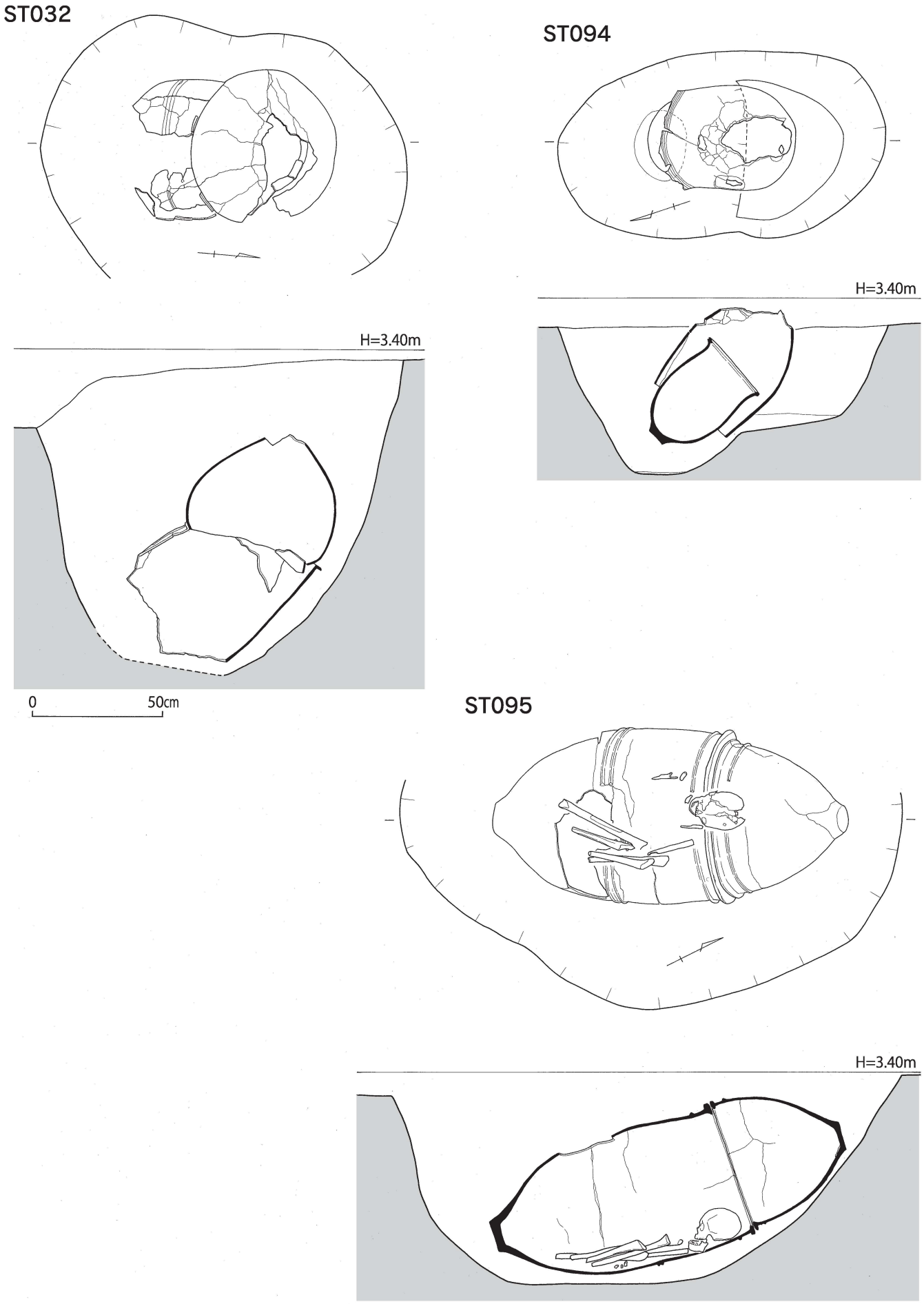




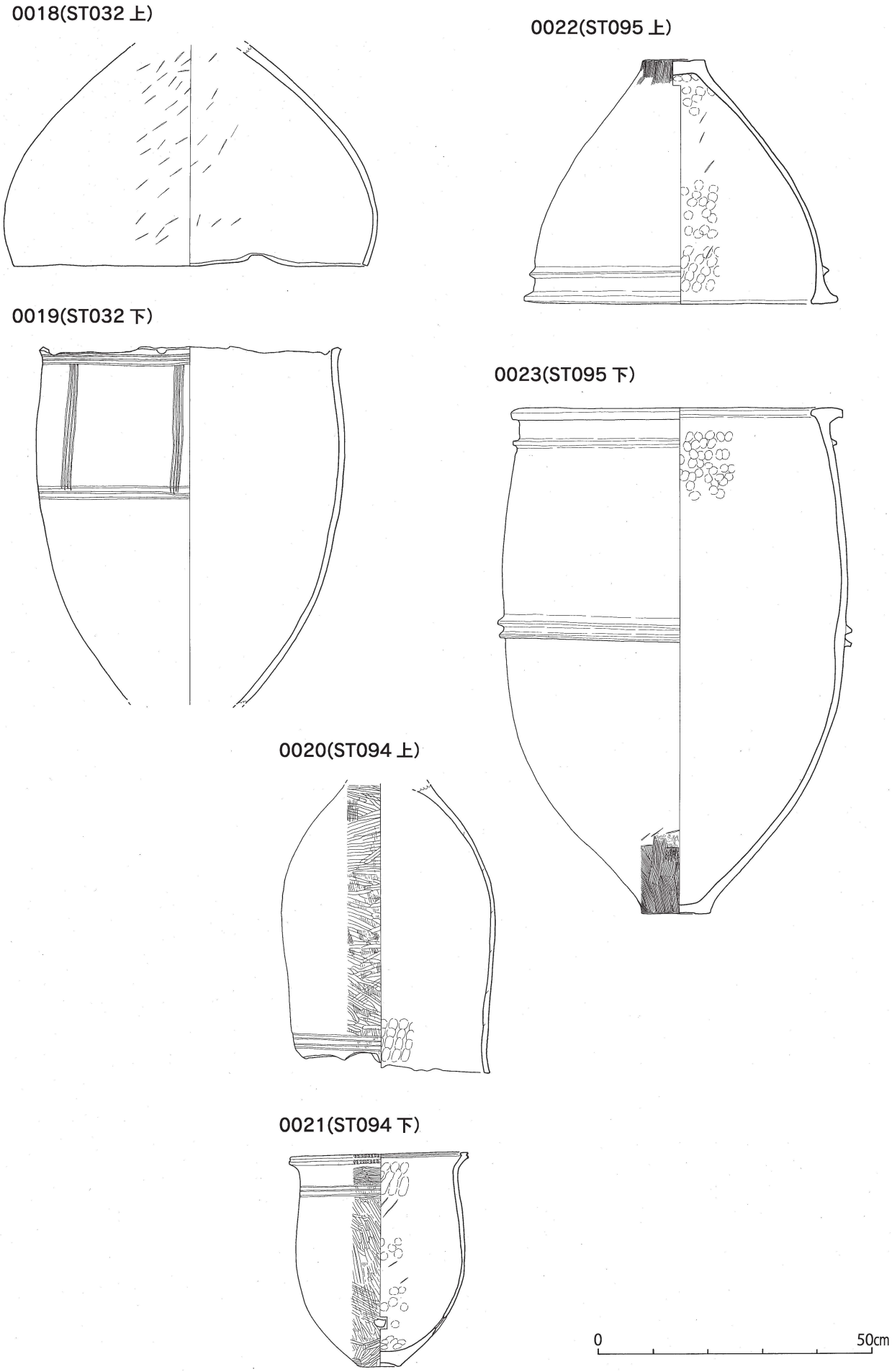
第９図　ST018･048･049 遺構実測図 (1/20)　0　50cm



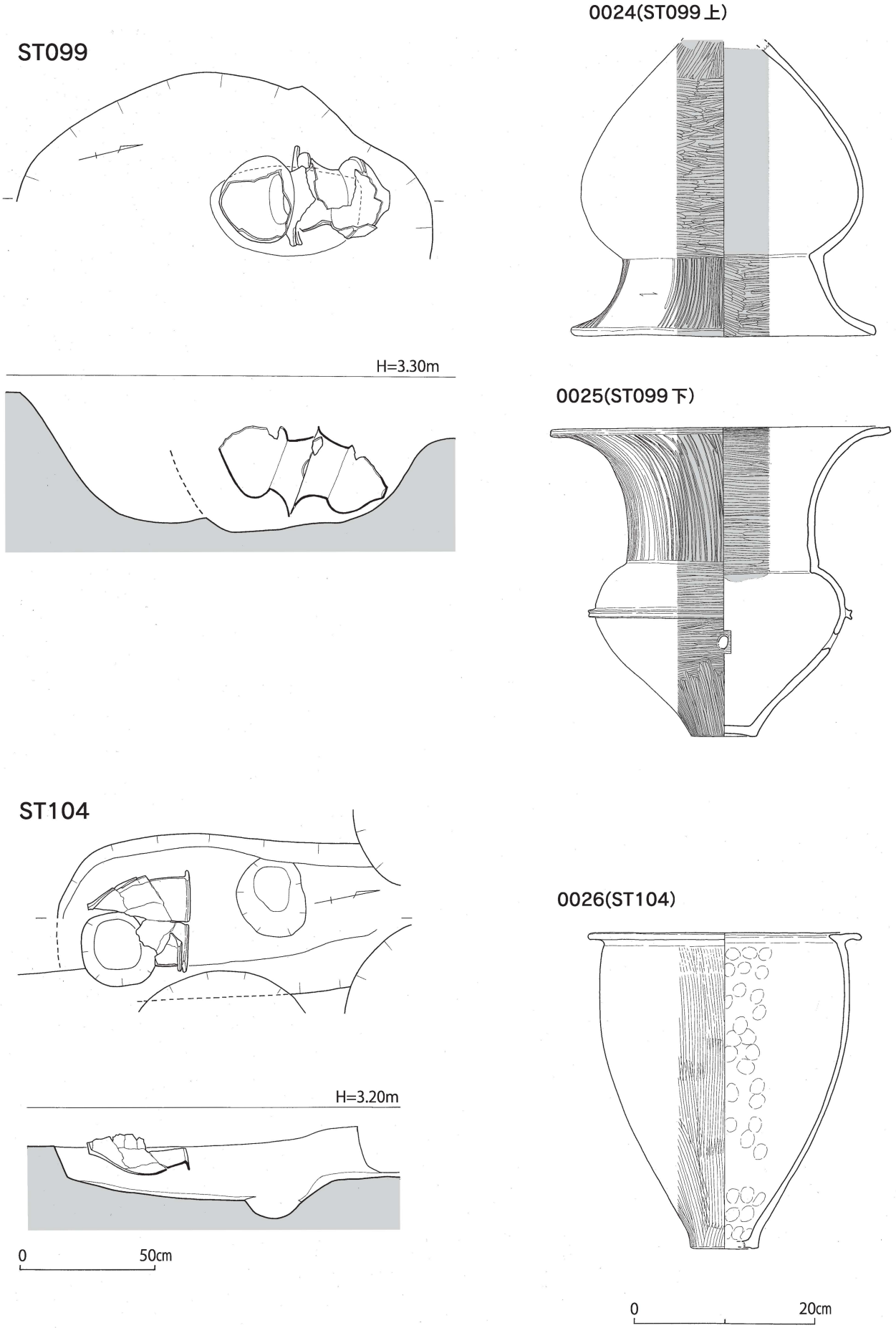
第 10 図　ST013･018･048･049 遺物実測図 (ST018 は 1/10･0015 は 1/4･その他 1/6)



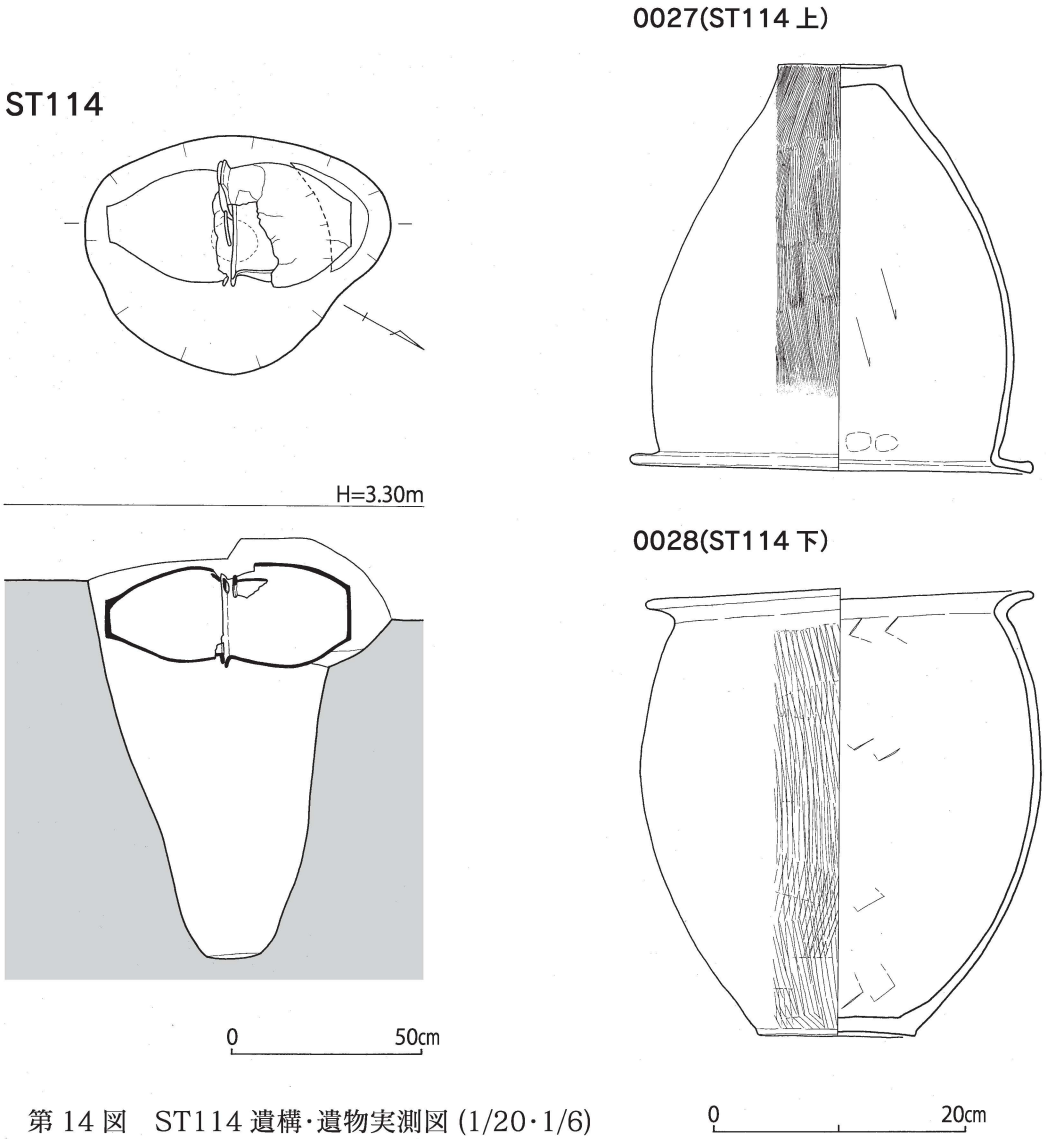
第 11 図　ST032･094･095 遺構実測図 (1/20)



第 12 図　ST032･094･095 遺物実測図 (1/10)



第 13 図　ST099・104 遺構・遺物実測図 (1/20・1/6)

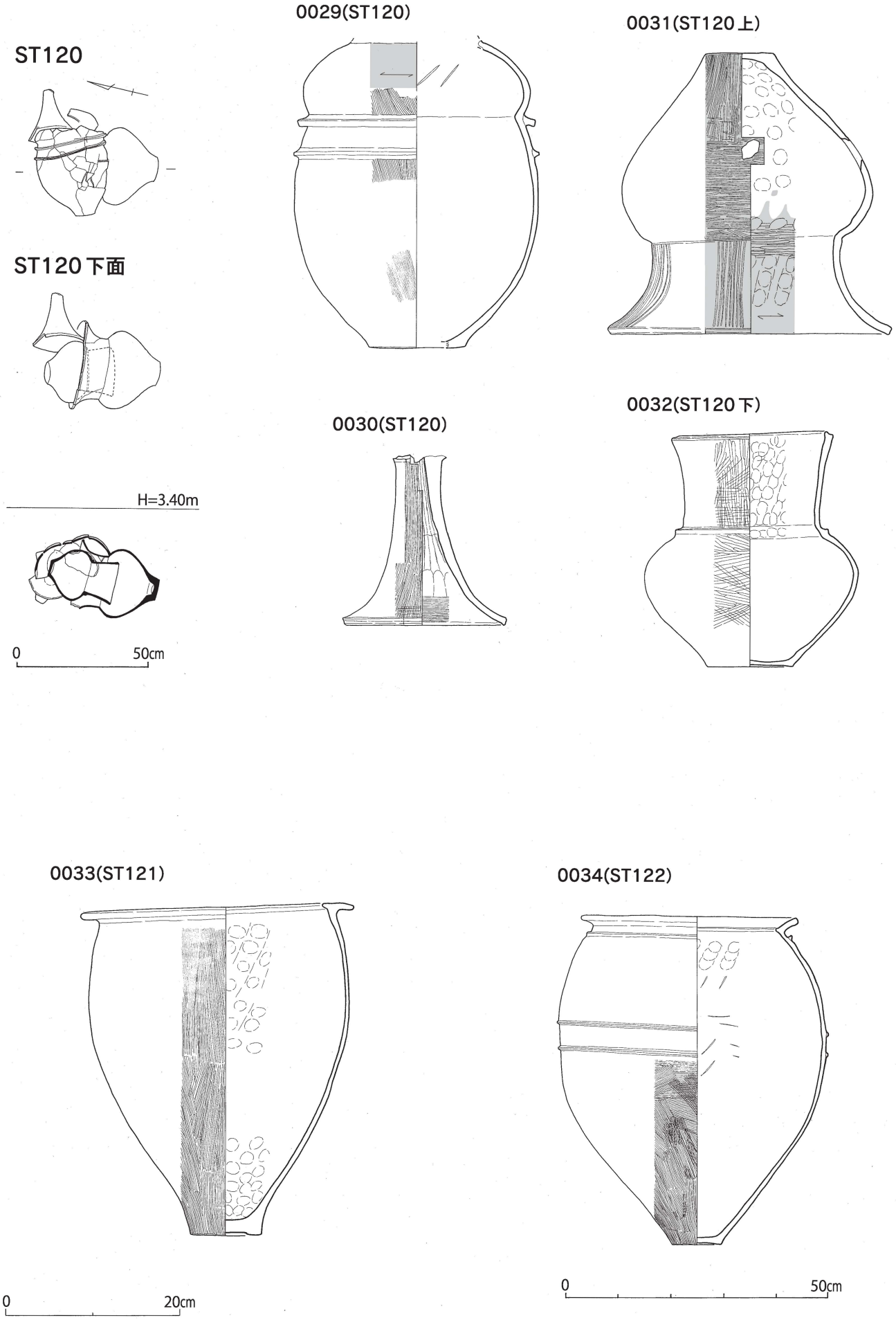


第 14 図　ST114 遺構･遺物実測図 (1/20･1/6)

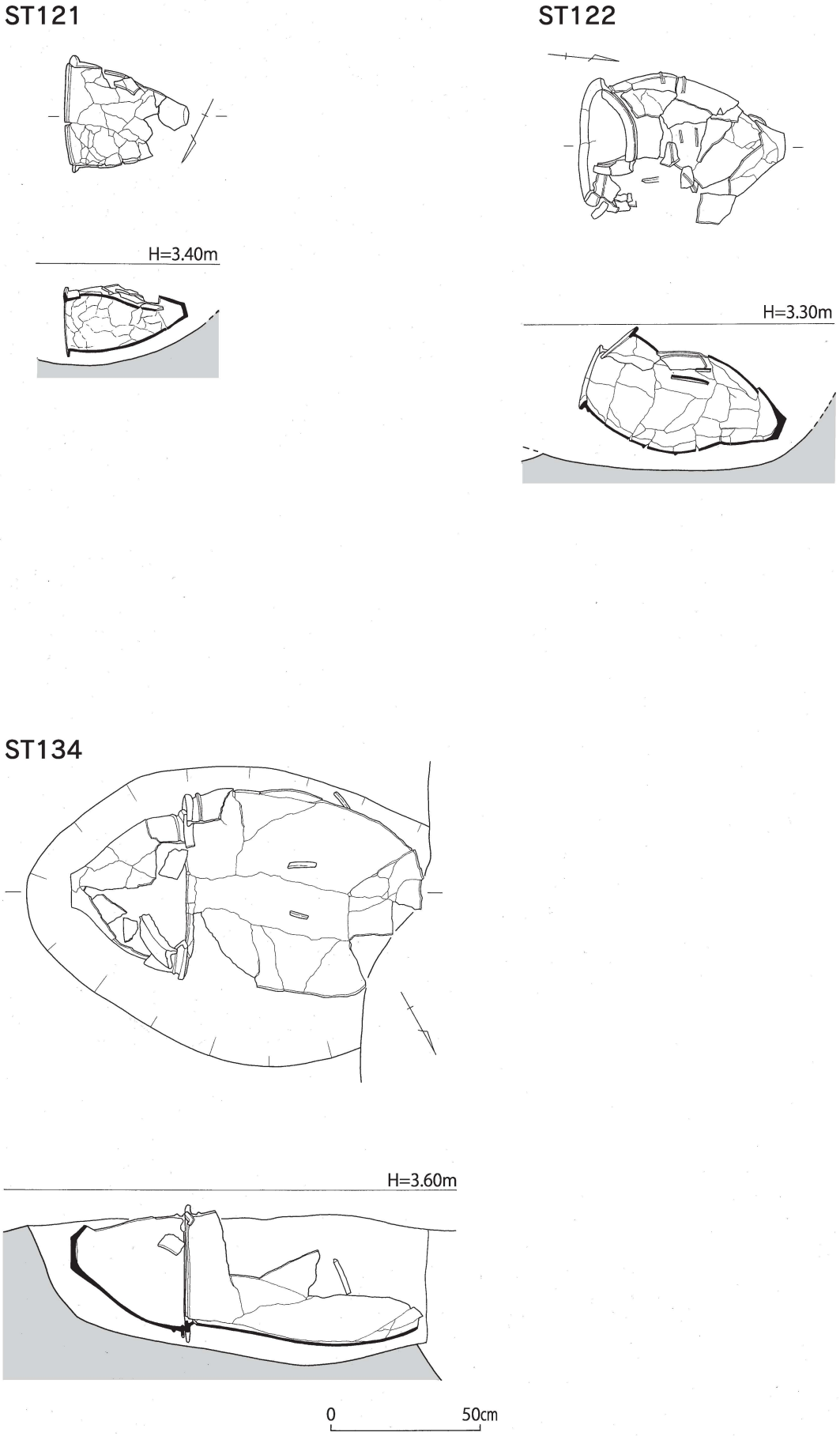
突帯下に穿孔を施し、この穿孔は出土時点で上側頂部に近い位置に穿っている。

ST104（第 13 図） 調査区の南側に位置し、上半部は削平を受けている。墓壙掘方は南北に長い溝状を呈するが、北端は SK096･098 に切られ、本来の長さは不明である。現状で南北 1.2m、幅 60 ㎝、深さ 28 ㎝を測る。棺は主軸を N-12°-E にとる小型甕の単棺で埋置角度は 10°前後である。第 13 図 0026 は小型の甕で口径 29.6 ㎝、器高 34.2 ㎝を測る。色調は淡黄褐色～淡灰褐色を呈し、胎土に 5 ㎜以下の白色砂を多く含む。調整は外面は縦ハケ、口縁は横ナデ、内面は指オサエ後ナデを施す。

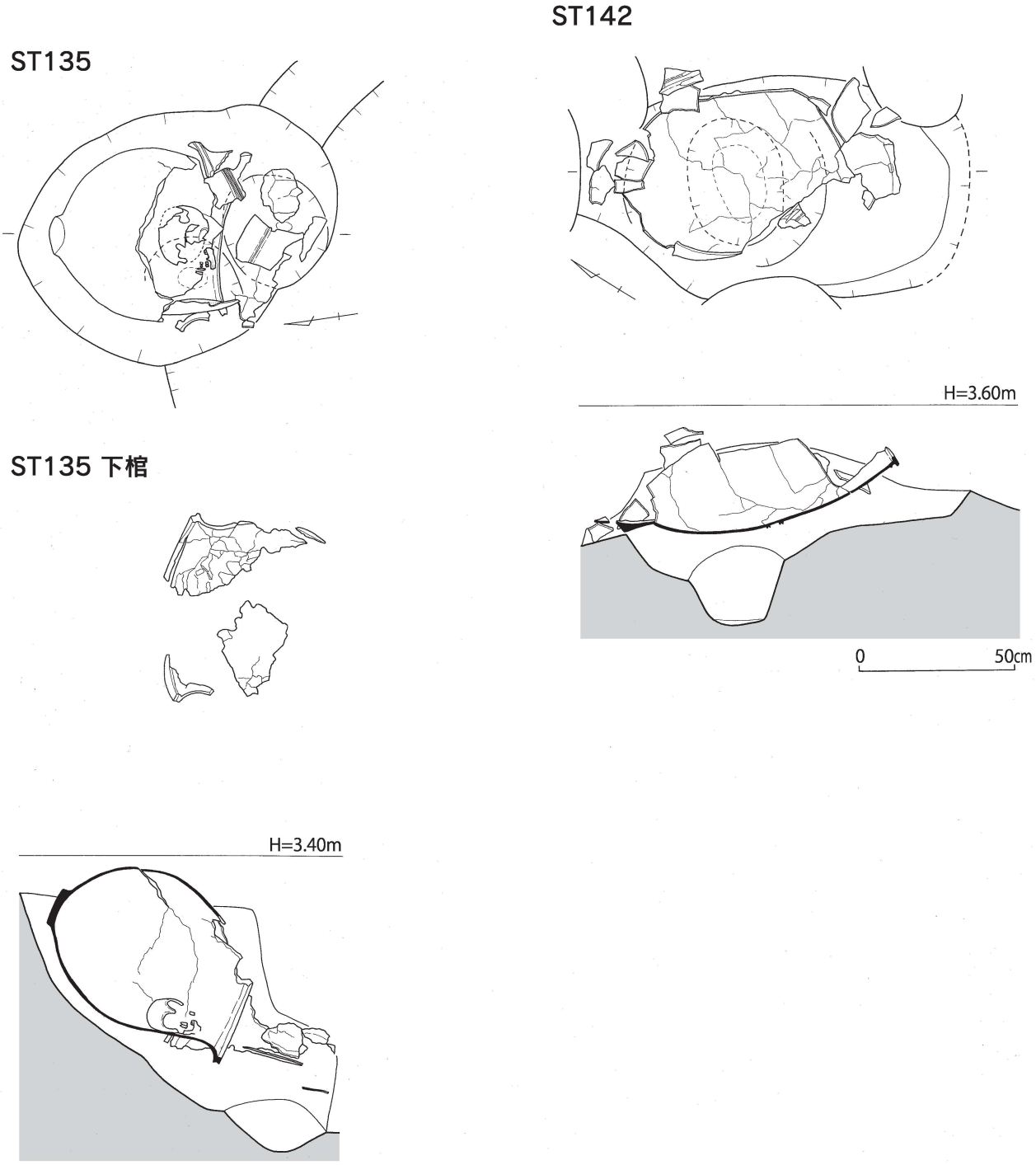
ST114（第 14 図） 調査区の東側に位置し SD075 を切る。墓壙掘方は南北に長い楕円形を呈し、東側がやや膨らみを持つ。長径 81 ㎝、短径 67 ㎝を測る。底面北側にテラス状の平坦面を設け、南側はを柱穴状に掘り込む。テラスからの深さは 76 ㎝を測る。棺は主軸を N-29°-W にとる小型甕の複棺で埋置角度はほぼ水平である。人骨、副葬品は出土していない。第 14 図の 0027 は上棺である。小型甕で土圧のため口縁が楕円形を呈す、口径 28～31.5㎝、器高 31.7 ㎝を測る。色調は橙褐色を呈し、胎土中に白色砂を多く含む他 6 ㎜程の小礫も含む。調整は外面は縦ハケ。口縁は横ナデで外面縦ハケの上端をナデ消す。内面は縦方向のナデで、口縁下に指オサエの痕跡が残る。0028 は下棺である。小型甕で口径 30 ㎝、器高 34.7 ㎝を測る。橙褐色を呈し、外底部に黒斑がある。胎土中に白色砂、赤褐色粒、黒色粒を多く含む。調整は外面が粗い縦ハケ、口縁が横ナデ、内面は指オサエ後板による斜め方向のナデを施す。



第 15 図　ST120 遺構･遺物、ST121･122 遺物実測図 (1/20･1/6･0034 は 1/10)



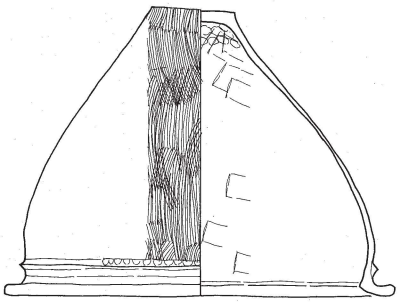
第 16 図　ST121･122･134 遺構実測図 (1/20)



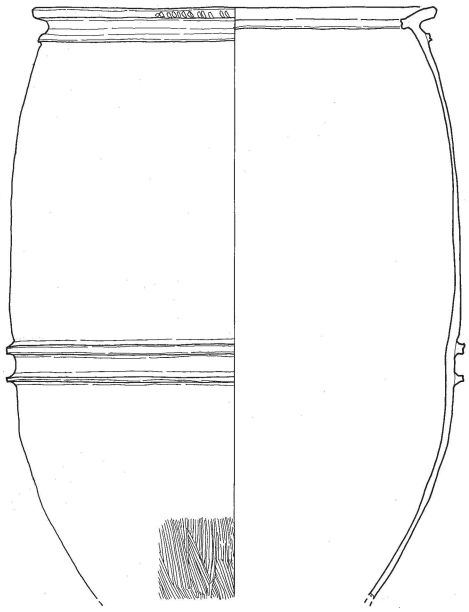
第 17 図　ST135･142 遺構実測図 (1/20)

ST120(第 15 図)　調査区の中央やや東側に位置し、SD075 を切る。覆口の小型壺棺である。掘方は SD075 の埋土と区別がつかず不明である。0032 の直口壺に 0031 の広口壺を蓋として被せ、転がらないように 0030 の高坏脚で支え、その上から半裁した 0029 の瓢型土器をかぶせている。0032 が蓋にも見えるが、0029 の瓢型土器が 0032 を覆っているため、0032 を棺とした。埋土、壺棺中から人骨、副葬品などは出土していない。出土遺物 (第 15 図 0029～0032)。0029 は瓢型土器である。復元底径 11 ㎝、遺存高 34.3 ㎝を測る。色調は黄褐色を呈し、口縁部が丹塗りだったと思われ肩部に赤色顔料が垂れている。胎土は微粒～5 ㎜程の白色砂を多く含む。外面は肩部が横方向のミガキ、胴部は縦ハケで突帯間と胴部下半はナデのためハケ目が消えている。内面は全面的に板によるナデを施す。底部から胴部下半に黒斑がある。0030 は高坏脚である。底径 18.5㎝を測る。外面は丹塗りで、内面は淡黄褐色を呈す。胎土に細砂を少量含む。調整は外面が縦方向のミガキ、端部が横ナデ、

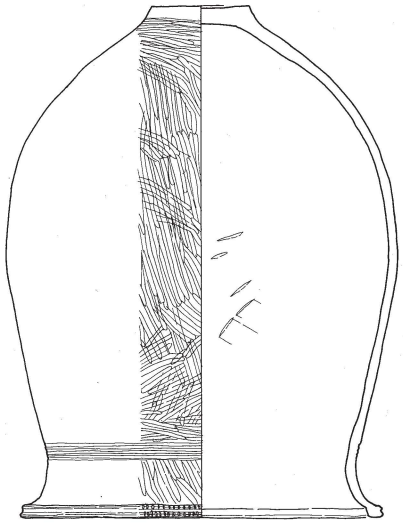
0035(ST134 上)



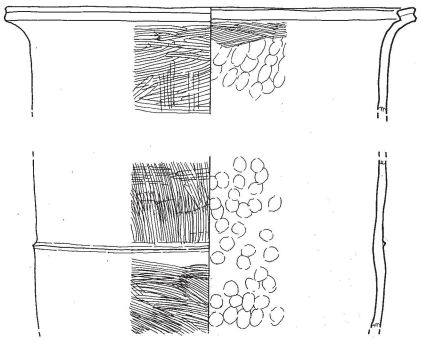
0036(ST134 上)



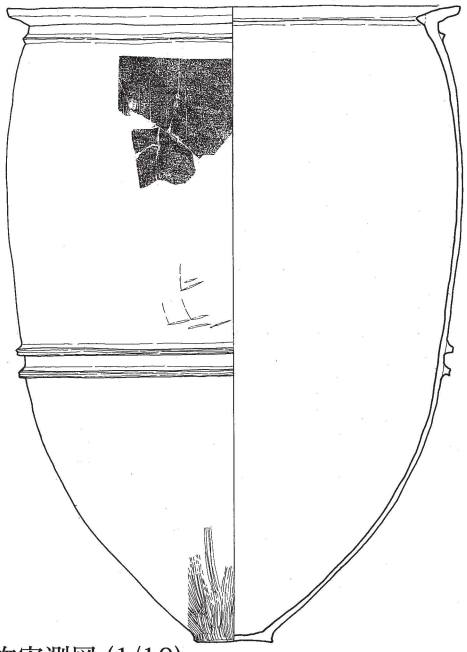
0037(ST135 上)

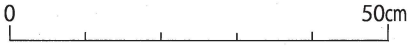


0038(ST135 下)



0039(ST142 下)





第 18 図　ST134･135･142 遺物実測図 (1/10)

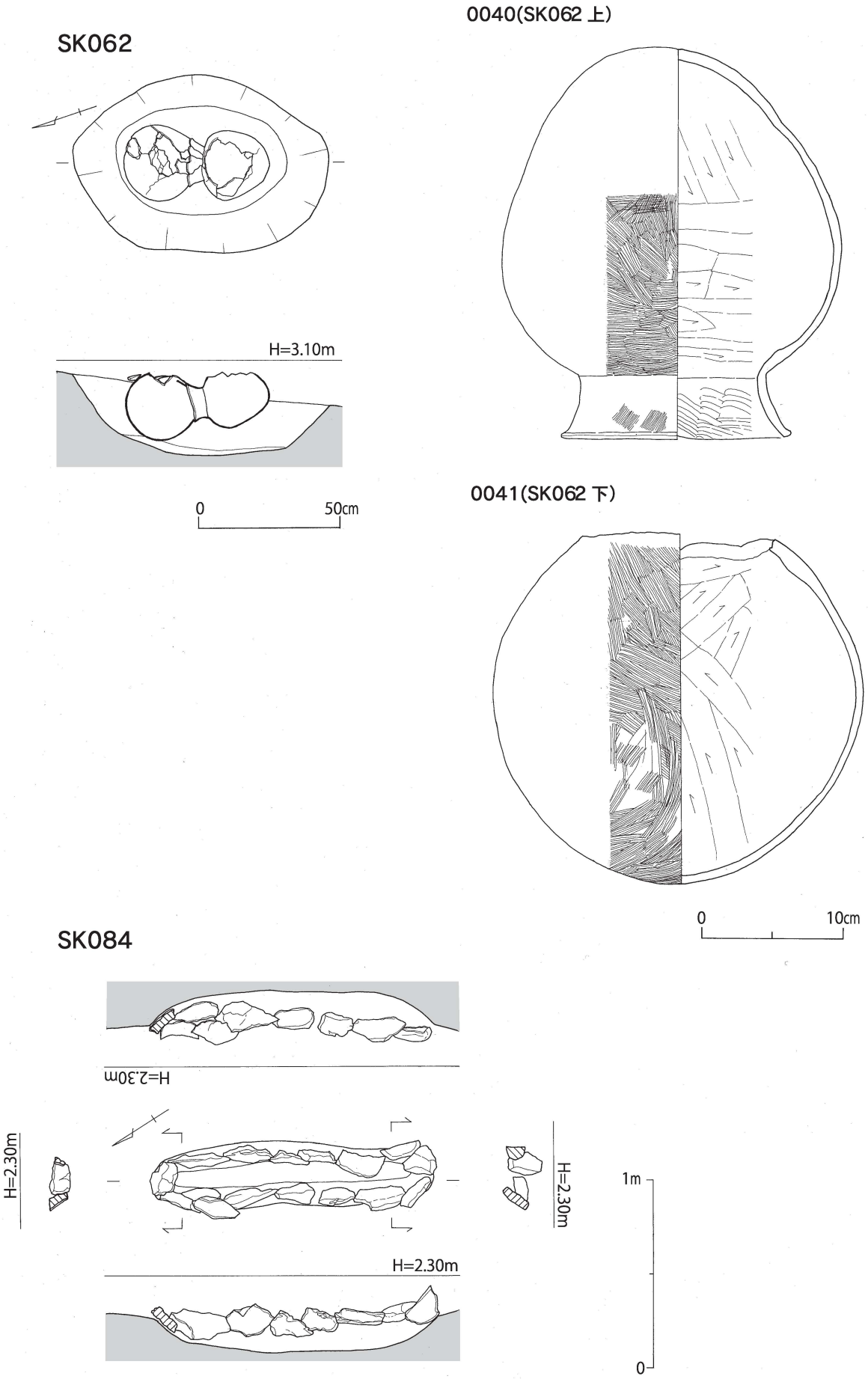
内面は上夫 2/3 にシボリ痕が残り、下 1/3 はそれをナデ消した後下端は横方向のハケ目を施す。0031 は広口壺である。口径 31.7 ㎝、器高 31.4 ㎝を測る。色調は底部を除く外面と内面の肩部から上は丹塗り、内面胴部は淡黄褐色を呈し、垂れた丹が点在する。胎土は精良で砂粒を少量含む。調整は外面が頸部から上は横方向の丁寧なミガキの上に縦方向の 8 本前後のミガキを 1 組の暗文とし、一周で 7 組の暗文を施す。胴部上半は横方向のミガキを胴部周囲を 7分割して施し、胴部下半は縦方向の粗いミガキを施す。内面は口縁が横方向のミガキ、頸部が横方向の太い幅のミガキ、胴部は指オサエ後ナデを施す。胴部に焼成後外面から穿孔を施す。0032は直口壺である。口径 18.1㎝、器高 26.3 ㎝を測る。頸部に断面三角形の突帯が付く。色調は淡橙黄褐色を呈し外面は黒色顔料を塗布していたと思われる。外面胴部は底部を中心とする約 1/2 は表面が剥落している。胎土には白色砂を少量含む。調整は外面の頸部から上が縦方向の粗いミガキ、突帯は横ナデで胴部は横及び斜め方向のミガキを施す。胴部下半から底部は剥落のため不明。口縁内外は横ナデ、内面はほぼ全面に指オサエ後軽いナデを施す。

ST121(第 16 図) 調査区の東辺中央部に位置し SD075 を切る。墓壙掘方は不明である。棺は主軸を N-65°-E にとる小型棺の単棺で埋置角度はほぼ水平である。土圧で上側が割れて落ち込んでいる。人骨は遺存していない。出土遺物 (第 15 図 0033)。0033 は小型棺で甕形を呈す。口径 30.5 ㎝、器高 37.2 ㎝を測る。色調は黄褐色で一部で少し赤味を帯びる。胎土は 5 ㎜以下の白色砂を多く含む。調整は口縁部は横ナデ、外面は縦ハケで口縁付近は横ナデでナデ消されている。内面は指オサエ後ナデを施す。

ST122(第 16 図) ST121 の北西側 30 ㎝に位置する。墓壙掘方は不明である。棺は主軸を N-5°W にとる小型棺の単棺で埋置角度は 25°を測る。人骨は遺存していない。出土遺物 (第 15 図 0034)。0034 は中型の甕である。口径 41 ㎝、器高 62.5 ㎝を測る。頸部に 1 条、胴部に 2 条の突帯が巡る。色調は淡黄褐色を呈し、口縁突帯下に 40×30 ㎝の黒斑、反対側胴部突帯に径 20 ㎝の黒斑がある。胎土は白色砂の他に赤･黒褐色粒を含む。調整は外面はハケ後に状藩部にナデを施しハケ目を消す。内面は全面ナデを施し、口縁下に指オサエの痕跡が残る。

ST134(第16図) 調査区の北側に位置する。墓壙掘方は東西に長い楕円形を呈し、西側を土坑に切られる。現状で長径 132 ㎝、短径 99 ㎝、深さ 49 ㎝を測る。棺は主軸を N-61°-W にとる大型棺の複棺で埋置角度はほぼ水平である。削平のため上側 1/3 程と下棺底部が欠損する。出土遺物 (第 18 図 0035・0036)。0035 は上棺で大型の鉢である。口径 51.4 ㎝、器高 38.2 ㎝を測る。口縁下に 1 条の突帯を巡らす。色調は淡黄褐色を呈し、突帯下から底部まで及ぶ黒斑が対称の位置に 2 カ所みられる。調整は口縁は横ナデで、外面は縦ハケ、内面は板状工具によるナデを施す。0036 は下棺で大型の甕である。口径 53.4 ㎝、遺存高 71.8 ㎝を測る。口縁下に 1 条、胴部に 2 条の突帯を巡らす。色調は淡褐色で部分的に黄･赤が強く斑状をなす。胎土は径 1 ㎜の白色砂を多く含む。調整は口縁部と胴部突帯部分が横ナデ、胴部上半が縦方向のナデで下半に縦ハケが残る。内面は縦方向のナデを施す。

ST135(第 17 図) 調査区の北東側に位置する。南端を SE124 に切られ、上棺の口縁の一部と下棺の大部分を削平された他、下棺は焼成があまく軟質なため、出土時には細片化が進んでいた。墓壙掘方は現状で長径 103 ㎝、短径 81 ㎝、深さ 78 ㎝を測る。底面に径 30 ㎝以上、深さ 16 ㎝の逆台形の掘り込みがある。棺は主軸を N-8°-E にとる大型棺の複棺で埋置角度は 25°前後である。人骨は SE124 に削られた時点でかなり破損したと思われ、頭骨と下顎骨のみが遺存状態が悪い状態で出土した。頭骨は上顎骨が欠損しており、歯のみが若干原位置を保って出土した。頭骨は北を上にして若干西を向いているが、これが埋葬時の姿勢のままかは不明である。出土遺物 (第 18 図 0037･0038)。0037 は上棺で大型の甕である。頸部に 4 本の沈線を巡らす。復元口径 47.4 ㎝、器高 67.4 ㎝を測る。



第 19 図　SK062･SK084 遺構･遺物実測図 (1/20･1/30･1/4)

色調は淡褐色で胎土に 2～3㎜の白色砂を多く含む。調整は外面がミガキ、内面は板状工具による丁寧なナデを施す。0038は下棺である。大型の甕で復元口径は約54㎝を測る。胴部に突帯を1条巡らす。色調は淡褐色～黒色を呈し、胎土に 3㎜以下の白色砂を多く含む。調整は口縁部が横ナデで、外面頸部が横方向のミガキ、突帯から上が縦ハケ、下が横ハケを施す。内面は全体にナデを施し、指オサエの痕跡が残る。

ST142(第 17 図) 調査区の北東側に位置する。墓壙掘方は南北に長い楕円形で両端を切られ、遺存状態は不良である。現状で長径 124 ㎝、短径 69 ㎝、深さ 38 ㎝を測る。底面中央に長径 39 ㎝、深さ 25㎝の柱穴状の掘込みを持つ。棺は主軸を N-31°-W にとり埋置角度は 20°前後である。出土遺物 (第 18 図 0039)。0039 は大型の甕で復元口径 59.6 ㎝、器高 83.7 ㎝を測る。口縁下に 1 条、胴部に 2 条の突帯を巡らす。色調は赤橙褐色で胎土に白色砂を多く含む他、赤褐色･黄･黒色粒を含む。調整は口縁と突帯部が横ナデ。その他はナデで底部付近に縦ハケが残る。内面は全面にナデを施す。

2) 壺棺墓

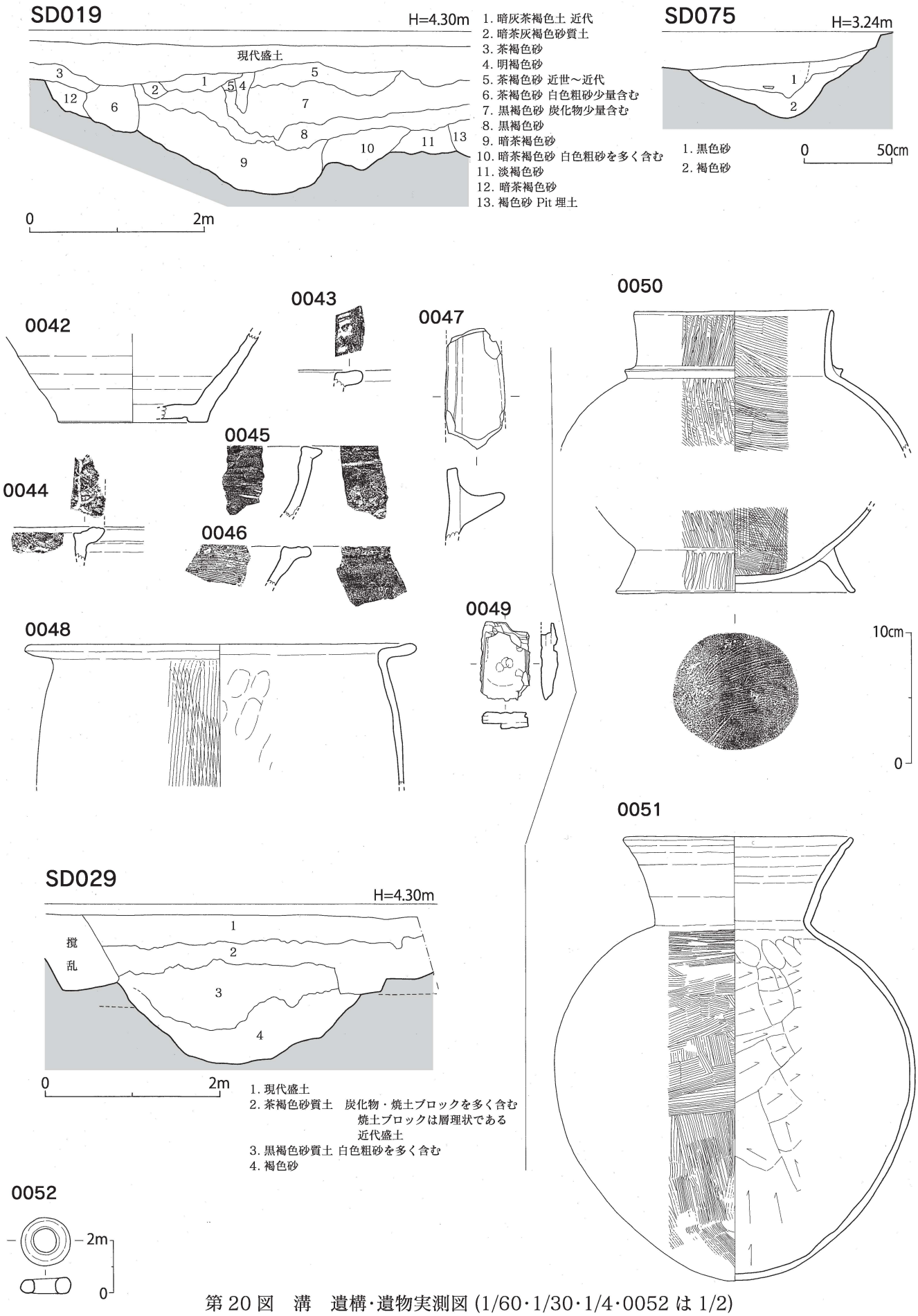
SK062 (第 19 図) 調査区の南端に位置する。 掘方平面は不整楕円形を呈し、長径 90 ㎝、短径 62 ㎝、深さ 29㎝を測る。主軸はN-19°-Eで断面は逆台形を呈す。棺は覆口の壺棺で南側の蓋は完形のまま、北側の棺は頸部から上を打ち欠く。人骨、副葬品は出土しなかった。古墳時代初頭で方形周溝墓と同時期と考えられる。0040 は上棺である。口径 16.2 ㎝、器高 27.6 ㎝を測る。色調は淡黄褐色で底部脇に径 8 ㎝の黒斑がある。外面は煤が付着する。胎土には径 4～5 ㎜の白色砂を多く含む。調整は口縁が横ナデで頸部はハケ後横ナデ、胴部上半は細かなハケ、胴部下半はナデを施す。内面は頸部が粗い横ハケ、上半は横方向のヘラケズリ、胴部下半は縦方向のヘラケズリである。0041 は下棺で口縁を打ち欠く。頸部径 13.6 ㎝、遺存高 24.8 ㎝を測る。色調は淡黄褐色を呈し、外面には煤が付着する。胎土は 5㎜以下の白色砂を多く含む。調整は外面がハケ目、内面がヘラケズリである。

3) 石棺墓

SK084 (第 19 図) 調査区の南西側に位置する。古墳時代前期の前方後方型を呈する周溝墓の溝 (SD029) 底面で出土した。石棺墓は東側くびれ部に位置するが、西側くびれ部でも小口に板石を使用した土壙墓 (SR236) が出土している (第 32 次調査　福岡市埋蔵文化財調査報告第 824 集『藤崎遺跡 15』2004 年)。石棺墓は長さ 152 ㎝、最大幅 38 ㎝を測り、主軸を N-32°-E にとる。石棺の幅は最小で 15 ㎝とかなり狭い。掘方の深さは 20㎝程で北東側には小口状の礫を置いている。棺は長さ 20～30 ㎝程の板状の石を東側に 7 枚、西側に 8 枚使用する。石は頁岩が多いが安山岩や花崗岩の円礫を打欠いた物も含まれる。板石は南北両端を除いて掘方底面から浮いた状態である。覆土は暗褐色を呈す。遺物は出土していない。

4) 方形周溝墓

SD029 (第 20 図) 西側の第 32 次調査で出土した 2 号周溝墓の続きである。幅 3m 前後、深さ 80 ㎝を測り、断面は U 字形を呈す。32 次では南端が攪乱で削平されるものの、、全長は約 20ｍと推定される。32 次で主体部と思われる土壙墓 (SR215) が出土したが、方形部の西に偏っているため本調査区でも埋葬施設の出土が期待されたが出土しなかった。出土遺物 (第 20 図 0050･0051)。0050 は台付直口壺である。口縁部と底部のみで胴部は出土していないが同一個体である。口径は 15.2 ㎝を測り、赤褐色を呈す。頸部に突帯を巡らす。調整は外面がハケ目の上から縦方向のミガキで突帯のみ横ナデ、内面は全体にハケ目を施す。高台は外面が縦方向のミガキ、内面は横ナデである。0051 は周構内で底面から 60 ㎝上で横倒しの状態で出土した。口径 17.4 ㎝、器高 33.8 ㎝を測る。外面は黄褐色、内面は橙褐色を呈し胎土に白色砂と雲母片を多く含む。2 点の他に土師器大型壺片、土師甕片等が出土した。



第 20 図　溝　遺構･遺物実測図 (1/60･1/30･1/4･0052 は 1/2)

5) 溝

SD019（第20図） 調査区の北側に位置する東西方向の溝である。幅3.1m、深さ73㎝を測る。埋土は暗茶褐色を呈す。周辺の調査により溝は等高線に沿って東西方向に延び、現在は長さ 400m程が確認されている。埋土中から龍泉窯系青磁碗Ⅰ類や土鍋の他に水注と思われる陶器片など 12～13 世紀頃の遺物が出土した。周囲の調査では、出土した遺物から 13 世紀後半と考えられている。出土遺物（第 20 図 0042～0049)。0042 は陶器甕底部、0043～0046 は土鍋口縁、0047 は移動式竈、0048 は弥生時代甕、0049 は不明鉄製品である。厚さ 2.5～3 ㎜程の板が 4 枚重なっている。

SD028（第4図） 調査区の北西側に位置する南北方向の溝状遺構で南側を SD029(13 世紀後半）に切られ SD019(古墳時代前期) を切る。西端は確認したが東端は SE002 など多くの遺構に切られて不明である。幅は 1.8m以上、深さは 8 ㎝を測り埋土は黒色を呈す。遺物は出土していない。

SD071（第4図） 調査区の南側に位置する東西方向の溝である。 撹乱の SK060 に切られており、それから西側を 071、東側を 073 としたが、同一遺構と判明したので 071 に統一する。調査区西側で SD029 を切る。最大幅 126 ㎝、深さ 44 ㎝を測る。埋土は暗褐色を呈す。埋土中から近世末から近代の陶器擂鉢等が出土した。出土遺物 (第 20 図 0052)。0052 は石英製と思われる装飾具である。

SD075（第20図） 調査区中央に位置する東西方向の溝で SD029(古墳時代初頭)に切られる。最大幅 126 ㎝、深さ 22 ㎝を測る。埋土は黒褐色を呈す。遺物は少ないが ST114 や ST120、ST121 の複数の甕棺 (弥生時代中期中頃) に切られており、弥生時代中期前半頃と考えられる。

6) 土坑

(1) 弥生時代の土坑

SK038（第21図） 調査区中央に位置する。 平面は南北に長い長方形を呈し 、長径 161 ㎝、短径 113 ㎝、深さ 76 ㎝を測る。主軸は N-5°-E である。断面は逆台形で南側が 15 ㎝ほど窪む。埋土は茶褐色砂で、甕棺片等が出土した。弥生時代後期頃か。

SK039（第21図） 調査区北端に位置し、東西に長い溝状を呈す。西端は 011 と 015 に切られる。現状で長さ 210 ㎝、幅 96 ㎝、深さ 68 ㎝を測る。埋土から甕棺片が出土した。弥生時代と思われる。

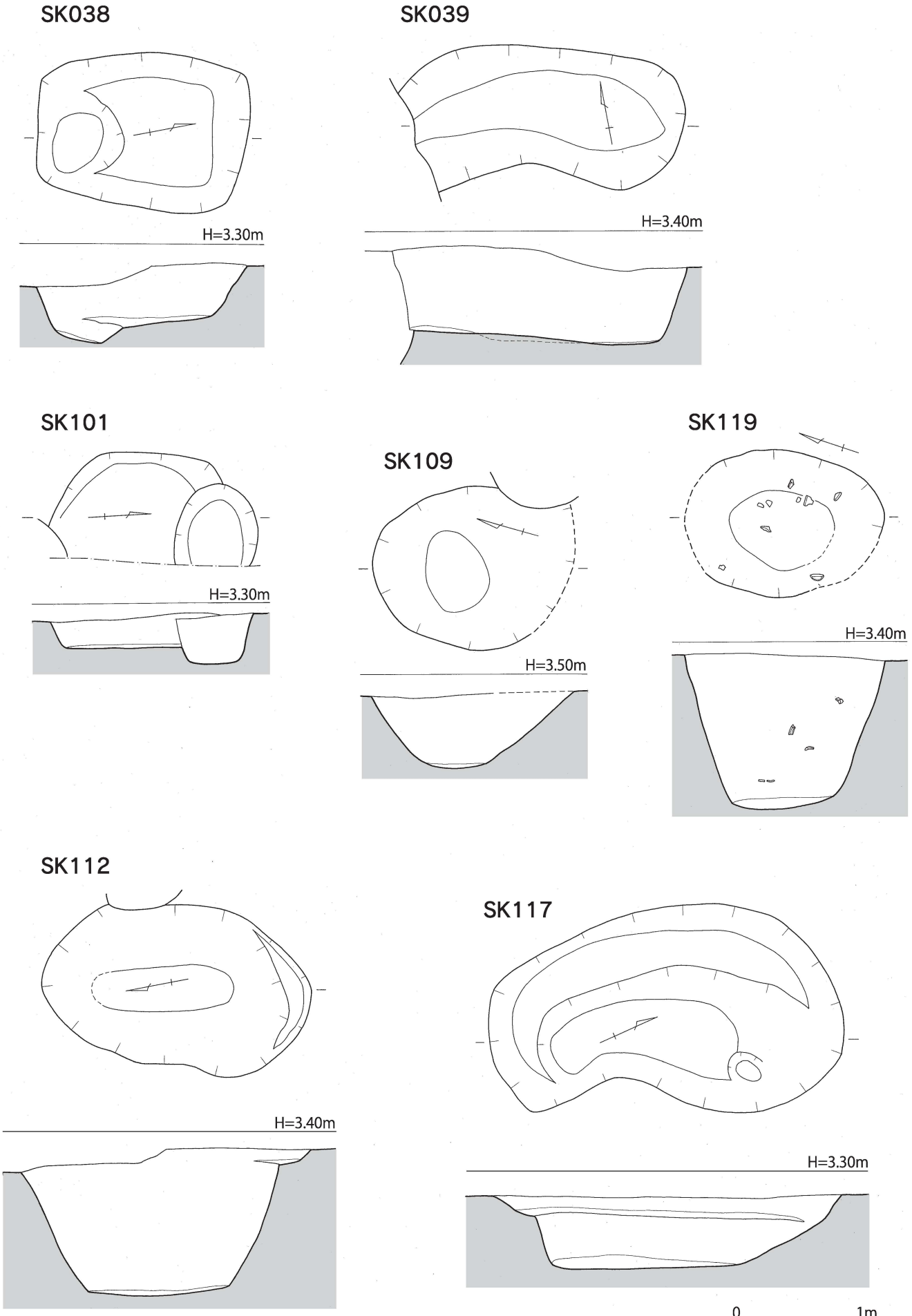
SK101（第21図） 調査区の南東隅に位置しSP100に切られる。遺構東端が調査区外に延びており、平面形は不明である。調査区内で南北 140 ㎝、東西 83 ㎝、深さ 26 ㎝を測る。埋土は茶褐色砂で、弥生時代中期前半の土器片が 2 点出土した。

SK109（第21図） 調査区のほぼ中央に位置し SK108(弥生時代中期) に切られる。平面は楕円形を呈し、長径 149 ㎝、短径 125 ㎝、深さ 60 ㎝を測る。主軸は N-15°-W で断面は逆台形を呈す。埋土は暗黄褐色砂で地山の砂がわずかに汚れたものである。土器片が 1 点出土した。

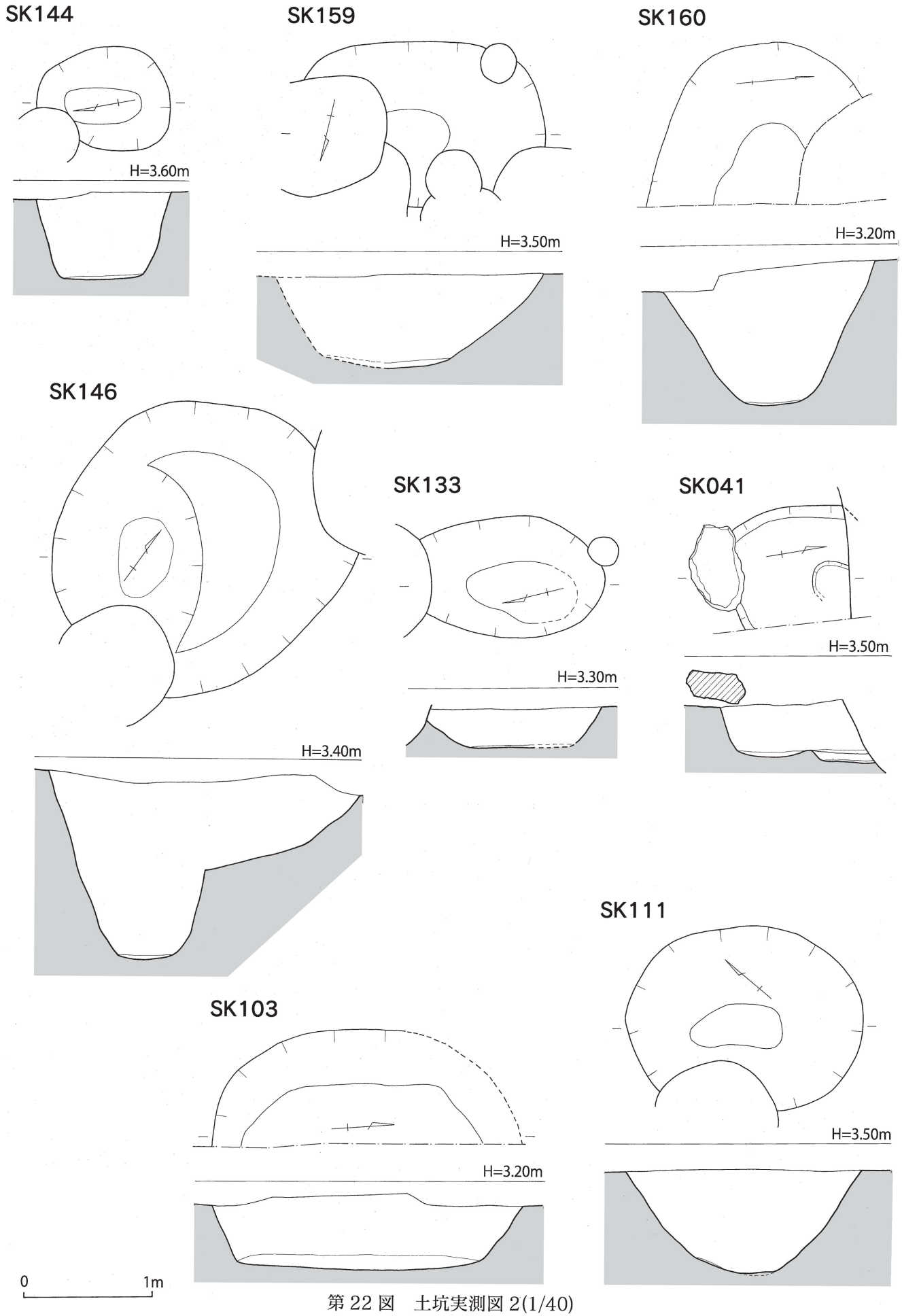
SK112（第21図） 調査区の南東側に位置し、SD075 と ST114 に切られる。 平面は南北に長い楕円形で長径 203 ㎝、短径 148 ㎝、深さ 111 ㎝を測る。主軸は N-11°-E で断面は逆台形を呈す。埋土は暗褐色砂である。遺物は少なく弥生時代中期の土器片が 4 点出土した。弥生時代中期前半と考えられる。

SK117（第21図） 調査区の中央西寄りに位置し、SD075、SK108・111 等の弥生時代中期の遺構に切られる。平面は南北に長い不整楕円形を呈し、長径 273㎝、短径 154 ㎝、深さ 78 ㎝を測る。埋土は淡褐色砂である。埋土中から土師皿と思われる土器小片が出土したが、混入と考えられる。

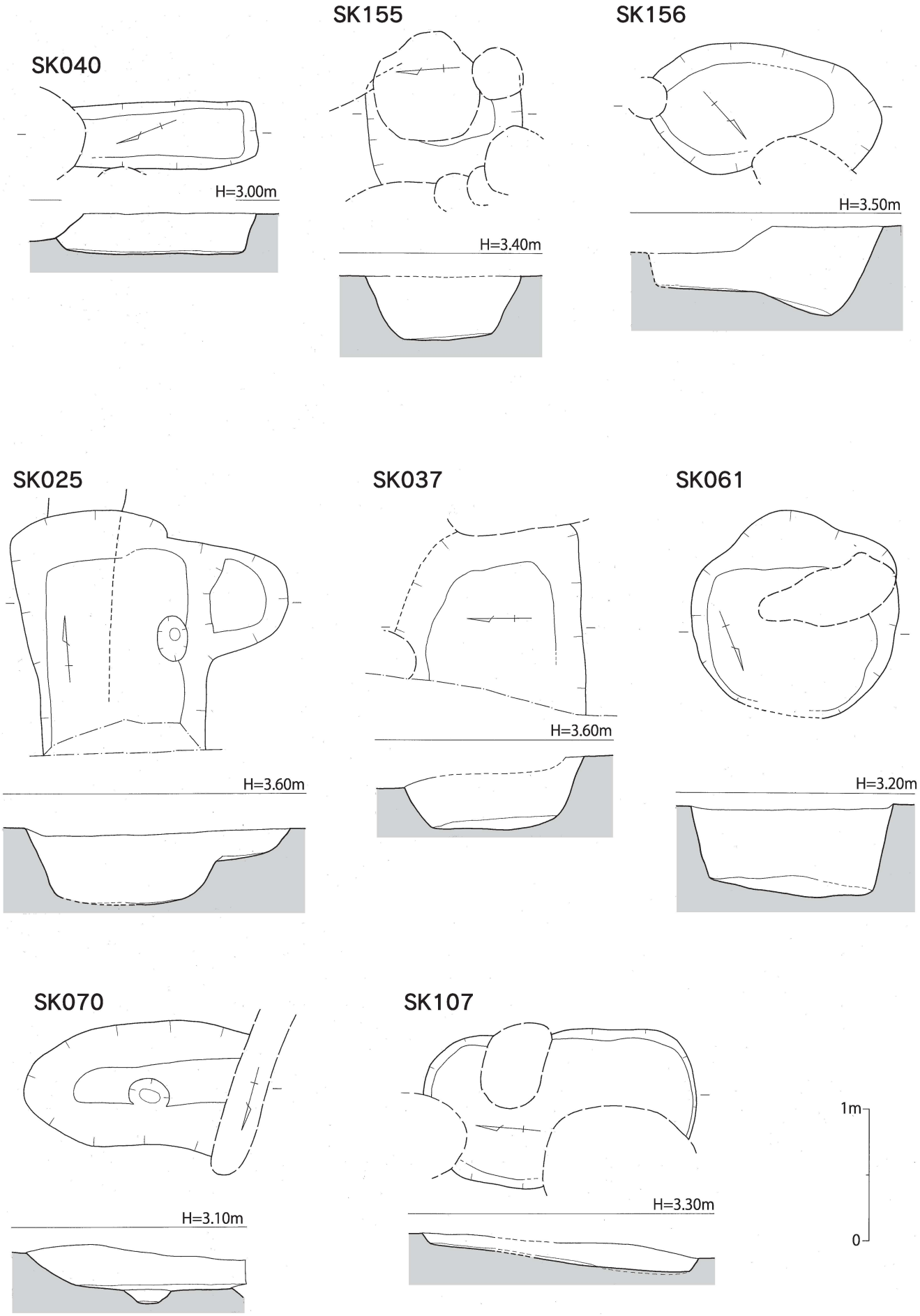
SK119（第21図） 調査区中央西寄りに位置する。平面は楕円形を呈し長径 152 ㎝、短径 112 ㎝、深さ 118 ㎝を測る。主軸は N-19°-W で、断面は逆台形を呈す。埋土は淡暗黄褐色で中期前半の甕棺片が数点出土した。



第 21 図　土坑実測図 1(1/40)



第 22 図　土坑実測図 2(1/40)



第 23 図　土坑実測図(1/40)

SK144（第22図） 調査区北東側に位置しSP138(弥生時代)とSP147(時期不明)に切られる。平面は楕円形を呈し、長径102㎝、短径73㎝、深さ66㎝を測る。主軸はN-10°-Eで断面は逆台形を呈す。埋土は赤褐色で甕棺と思われる破片が4点出土した。

SK159（第22図） SE002の北側に位置し、ST017等に切られる。平面は東西に長い楕円形を呈し、主軸をN-77°-Eにとる。長径は約2m、幅127㎝、深さ61㎝を測り断面は逆台形を呈す。埋土は淡褐色を呈す。遺物は出土していない。

SK160（第22図） 調査区南東隅に位置する。SK103・SD071に切られる。遺構東端が調査区外に延び、現状で東西1.2m、南北1.8m、深さ113㎝を測る。断面は逆台形を呈し、埋土は黒褐色である。遺物は出土していないが、埋土等から弥生時代の可能性が高いと思われる。

(2) 古墳時代から古代の土坑

SK146（第22図） 調査区中央東寄りに位置する。平面は楕円形で長径約2.3m、短径1.5m、深さ1.2mを図る。北側にテラスを持つ。古墳時代の可能性がある。

SK133（第22図） 調査区北東側に位置する。平面は南北に長い楕円形で主軸はN-13°-Eを測る。長径は約1.4m、短径95㎝、深さ24㎝を測り、断面は浅皿状を呈す。埋土は暗褐色砂で土器片が2点出土した。時期は不明瞭であるが、土色等から古墳時代末～古代の可能性が高いと考える。

SK041（第22図） 調査区中央に位置する。北側をSD019に切られる。現状で南北91㎝、東西110㎝、深さ38㎝を測る。遺構の南端に長径69㎝の角礫があるが、土壙墓の標石の可能性がある。埋土は茶褐色砂である。遺物は出土していないが、古墳時代の可能性がある。

SK103（第22図） 調査区の南東隅に位置する。遺構の大半が調査区外に延びる。現状で南北239㎝、深さ44㎝を測る。埋土は褐色砂で須恵器瑳や陶器片が出土した。古代と考えられる。

SK111（第22図） 調査区中央東側に位置しSK093(近代)に切られ、SK117(弥生時代)を切る。平面は楕円形で長径184㎝、短径141㎝、深さ82㎝を測る。主軸はN-39°-Wで断面は逆台形を呈す。埋土は赤褐色砂質土で須恵器高台付坏と土師質甕片が出土した。古墳時代後期と考えられる。

(3) 中世の土坑

SK040（第23図） 調査区中央に位置する。平面は長方形で、現状で長径155㎝、幅49㎝、深さ50㎝を測る。主軸はN-21°-Eで断面は箱形を呈す。埋土は茶褐色砂質土で糸切りの土師皿片が出土した。

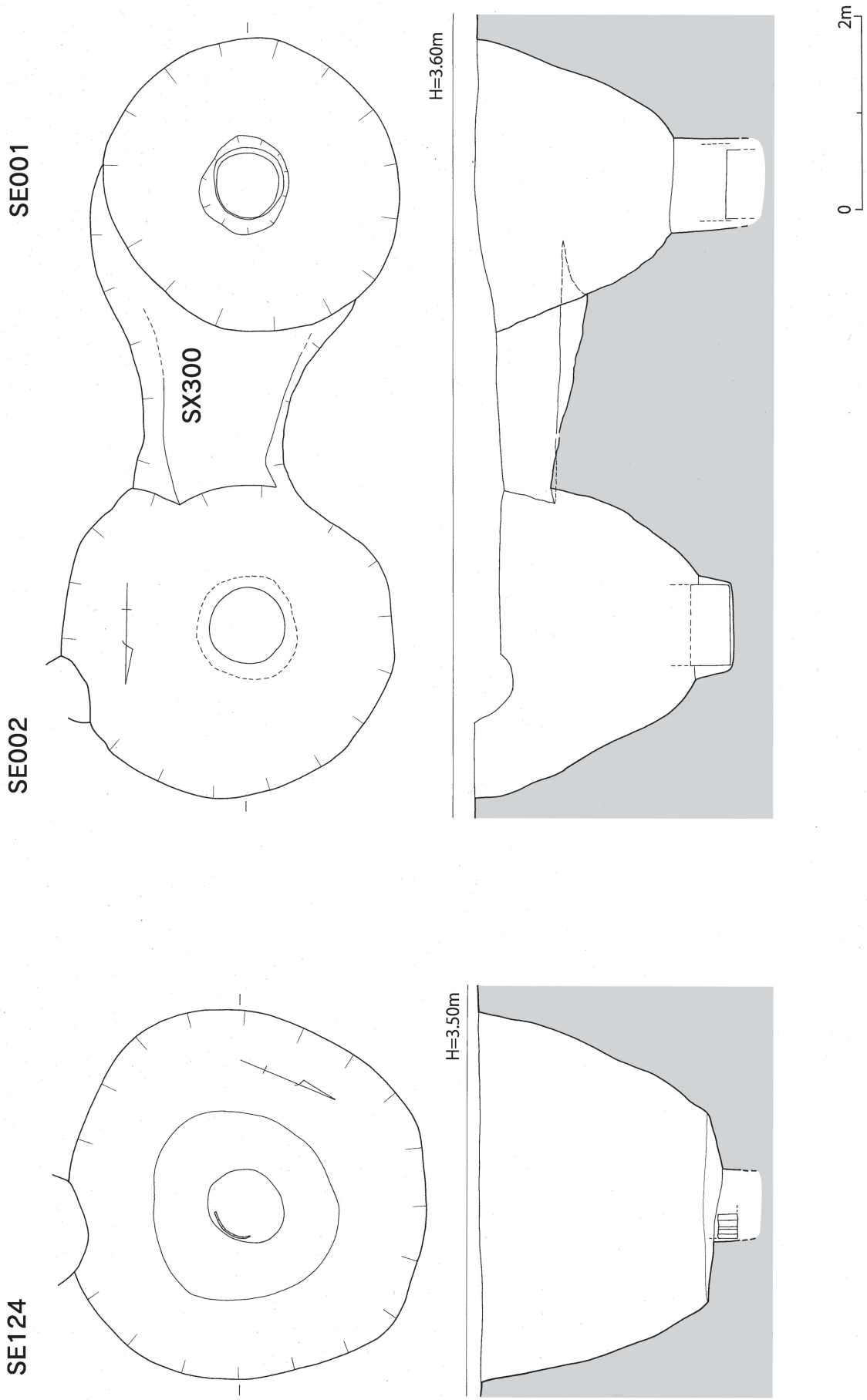
SK155（第23図） 調査区北東端に位置し、SK153・SK156(中世？)に切られる。平面は円形もしくは楕円形を呈し、現状で南北径116㎝、深さ44㎝を測る。断面は逆台形を呈し、埋土は淡褐色を呈す。遺物は出土していない。埋土等から中世の可能性が高いと思われる。

SK156（第23図） 調査区の北東端に位置する。SK128に切られる。平面は楕円形を呈し、長径180㎝、短径99㎝、深さ49㎝を測る。底面は南側は平坦で中央から北側に下がる。主軸はN-48°-Wである。埋土は淡褐色を呈し、時期不明の土器片が1点出土した。埋土等から中世の可能性が高いと思われる。

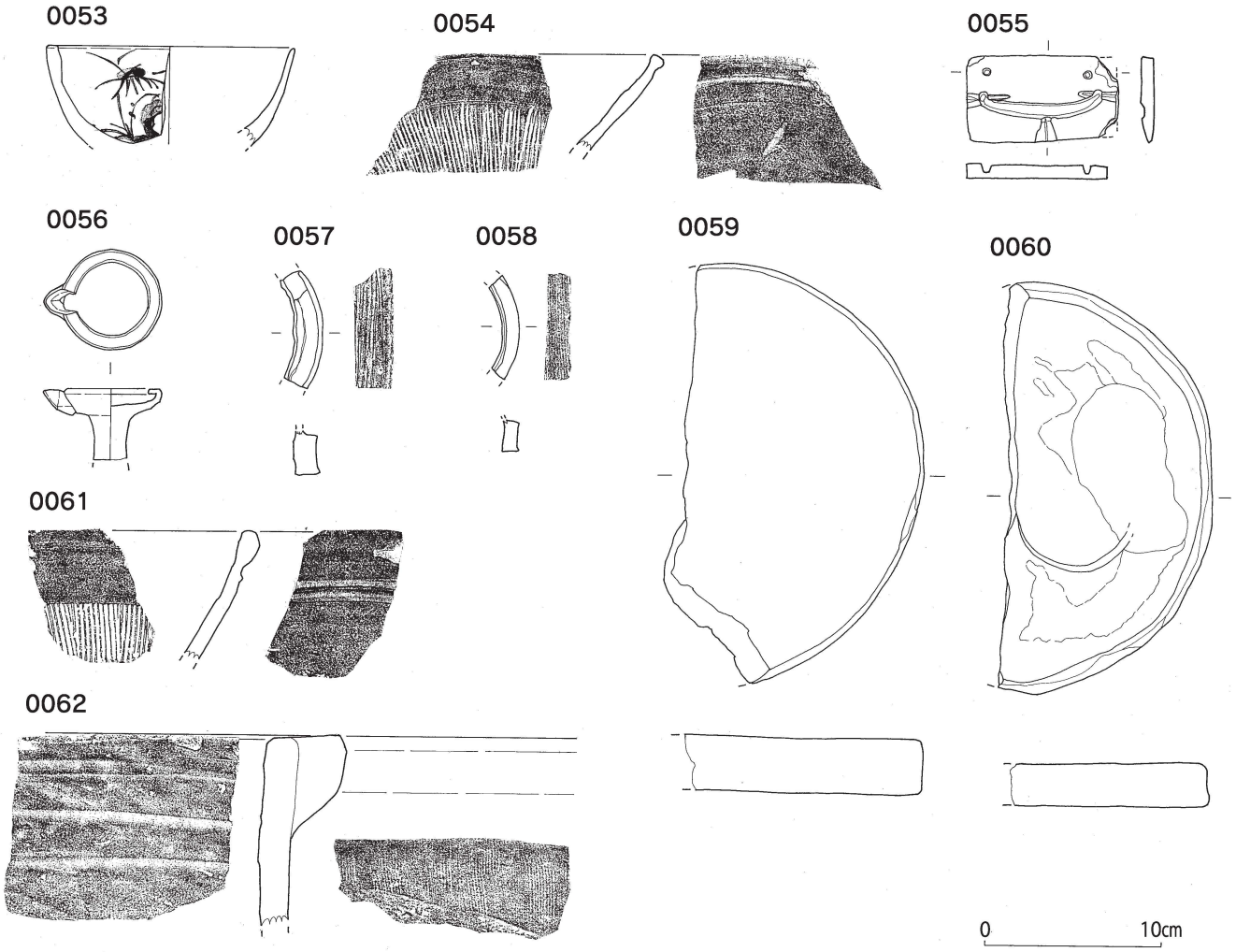
(4) 近世から近代の土坑

SK025（第23図） 調査区調査区中央西寄りに位置する。Ⅰ区の南端で検出したが、Ⅱ区では確認できなかった。平面は南北に長い長方形で北東隅から東側にむけて半円状に突き出す。南北183㎝、東西140㎝、深さ62㎝を測る。主軸はN-7°-Eで断面は逆台形を呈す。埋土は暗褐色砂質土で茶褐色砂を斑に含む。陶器類の他にトチン、サヤ鉢などの窯道具が出土した。

SK037（第23図） 調査区西辺中央に位置しSK025に切られる。遺構の西側が調査区外に延びる。現状で東西200㎝、南北120㎝、深さ54㎝を測る。埋土は茶褐色砂質土である。陶器類の他にサヤ鉢など窯道具が出土した。



第 24 図　井戸遺構実測図(1/60)



第 25 図　井戸出土遺物実測図(1/4)

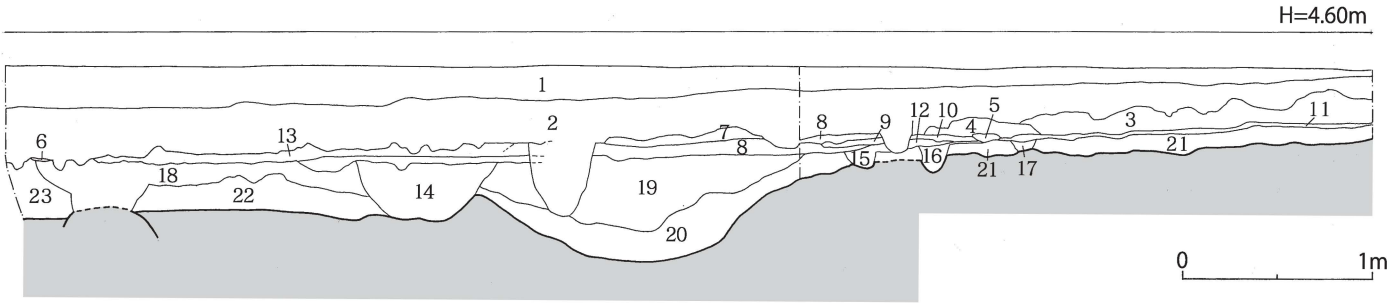
SK061(第 23 図)　調査区南西に位置し 052･059 の攪乱に切られる。平面は不整円形を呈し、170 cm ×157 cm、深さ 69 cmを測る。断面は箱形を呈す。埋土は褐色砂質土で窯道具を初めとして磁器、陶器片等が多数出土した。近代である。出土遺物 (第 27 図 0063～0066)。0063～0065 は窯道具である。0066 は陶器擂鉢である。今回の調査で多くの陶磁器が出土したが焼け歪みがあるのはこの 1 点のみである。

SK070(第 23 図)　調査区南西隅に位置する。東西に長い楕円形で、西端は調査区外に延びる。主軸は N-75°-E で、長径 1.7m 以上、幅 94 cm、深さ 35 cmを測る。底面中央に径 30 cm、深さ 10 cmの窪みを持つ。埋土から陶器碗の他トチン等の窯道具が出土した。

SK107(第 23 図)　調査区南東隅に位置し、096(現代)・SK106(近代)に切られる。平面は南北に長い隅丸長方形で長径 205 cm、短径 113 cm、深さ 23 cmを測る。埋土は暗褐色砂を呈し、陶器碗等の他に土錘が 1 点出土した。

７) 井戸　調査区内で 4 基の井戸を確認した。3 基は近世末から近代、1 基は現代の井戸である。SE001 と 002 の間には二つの井戸を結ぶ掘り込み (SK003) がある。003 は 002 と同じ掘り方で SE001 には切られているため SE002・SK003 は SE001 より古くなるが、SK003 は SE002 から SE001 に向かって広がって 001 とほぼ同じ幅まで広がるため、2 基の井戸は単に新旧掘り替えではなく、何らかの関連があるものと思われる。

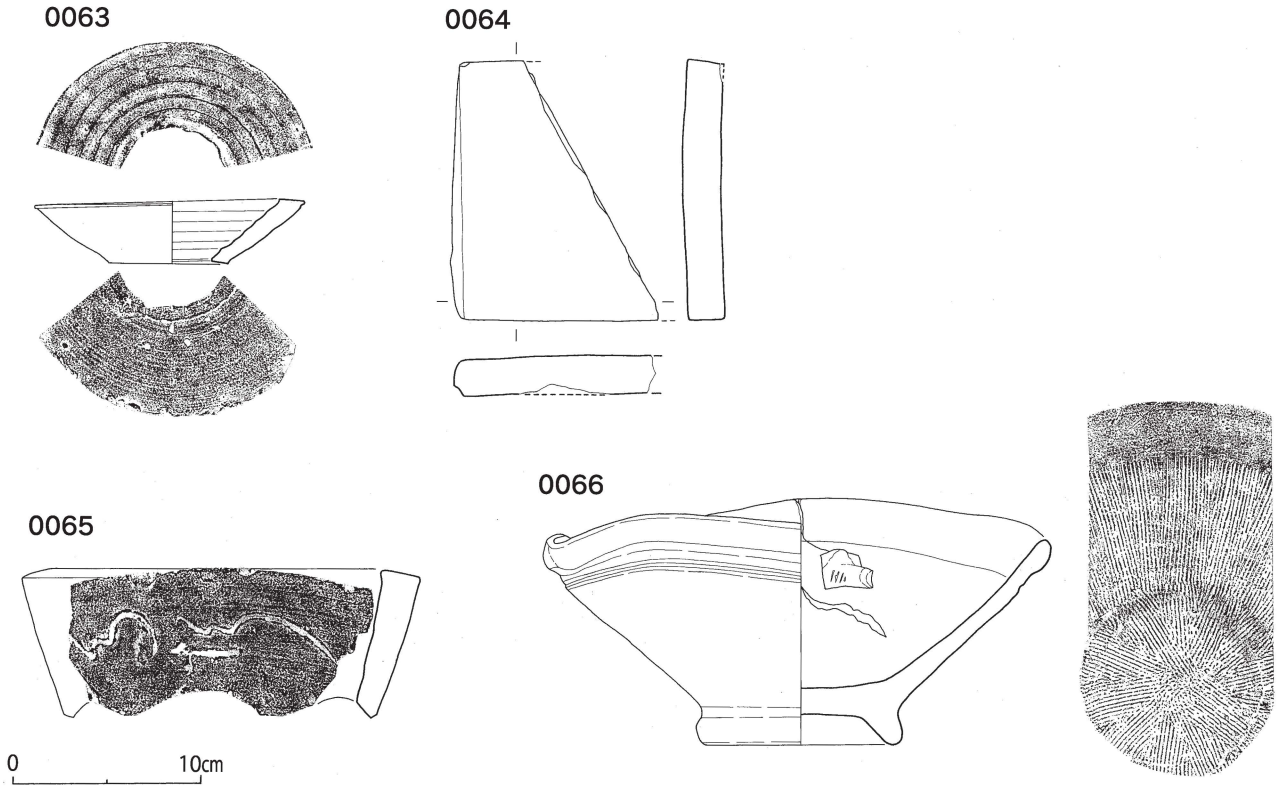
SE001(第 25 図)　調査区中央に位置する。平面は円形を呈し、直径 3m を測る。断面は深さ 2m までは漏斗状にすぼまり、その後垂直に掘り下げている。深さ 2.5mで木桶組みと思われる井筒の痕跡を確認した。深さ 2.7m(標高 0.97m) で湧水点に達し、壁の崩落の恐れがあるため掘り下げを中止した。



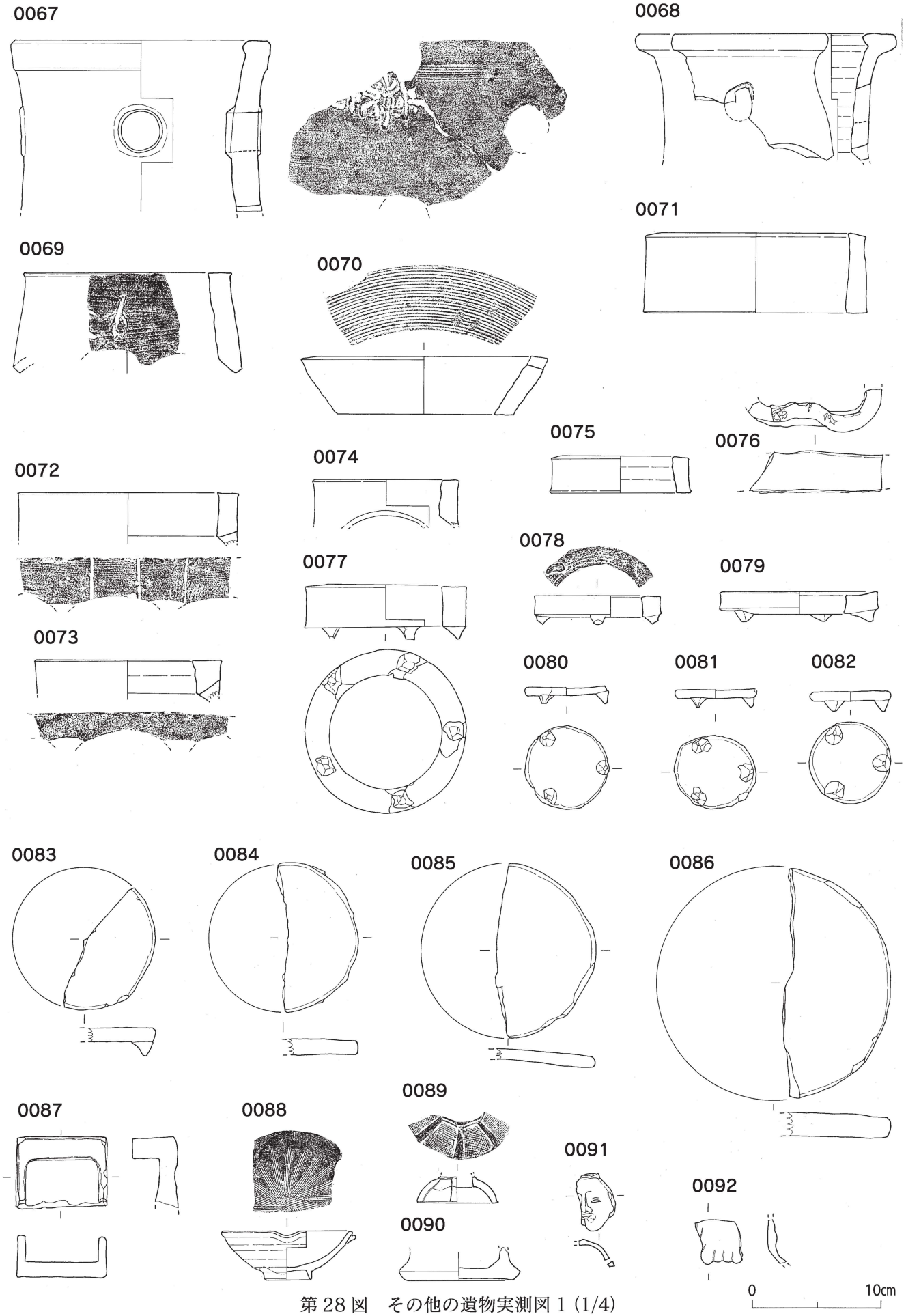
1. 現代盛土　砂利
2. 現代盛土　灰褐色土
3. 褐色砂　近代盛土
4. 暗赤褐色砂質土　近代盛土
5. 茶褐色砂質土　近代盛土
6. 褐色砂質土
7. 灰褐色砂質土
8. 灰茶褐色砂質土　褐色砂のブロック含む
9. 暗灰褐色砂質土　炭化物を多く含む
10. 灰褐色土　白色粘質土層(1㎜前後)を数層含む　ガチガチに締まる　整地層
11. 茶褐色砂質土　灰色粘土ブロック含む　ガチガチに締まる　整地層
12. 灰色砂質土　粘土粒子を含みガチガチに締まる　整地層
13. 黄褐色砂　ガチガチに締まる
14. 茶褐色砂質土　締まり弱い
15. 茶褐色砂
16. 褐色砂
17. 褐色砂
18. 暗褐色砂　1～3㎜の白色粗砂を多量に含む
19. 暗茶褐色砂質土　1～3㎜の粗砂を多量に含む　SD029 埋土
20. 黄白色砂　地山の砂がわずかに汚れている　SD029 埋土
21. 茶褐色砂　旧地表面
22. 暗黄褐色砂　044 埋土　062(古墳時代前期小児棺)はこの上面から掘込む
23. 暗灰褐色砂質土　近代廃棄土坑掘り込み

第 26 図　西壁土層実測図 (1/40)

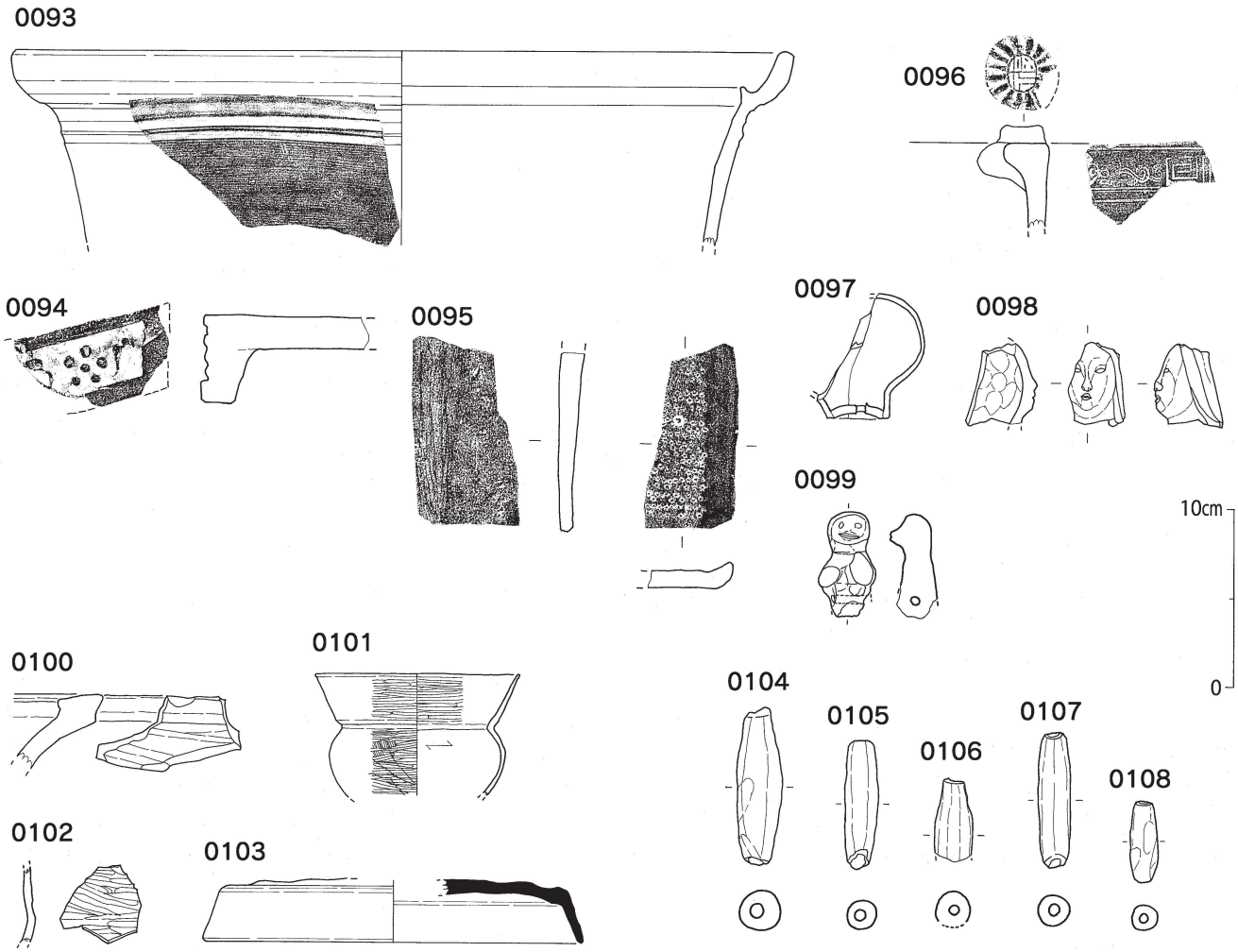
埋土中から近代陶磁器など多量の遺物が出土した。出土遺物 (第 25 図 0053～0055)。0053 は染付碗である。復元口径 14 ㎝、遺存高 5.5 ㎝を測る。釉は僅かに灰色を帯びた白色で紺の濃淡で花文を描く。0054 は陶器擂鉢である。暗赤褐色を呈し , 胎土には 1 ㎜程の白色砂を多く含む。0055 は蛇紋岩製の鋳型である。石は長さ 8.5 ㎝、幅 4.9 ㎝、厚さ 0.8 ㎝を測る。全面を研磨して鋳型面として使用しているのは 1 面のみである。製品は軽くカーブを描く幅 8.5 ㎝、長さ 7 ㎝の棒状を呈し、先端から内側に釘状の突起がある。投網用の錘もしくは火打ち金と思われる。図では下側に湯口がり、左右に空気の抜穴が開く。上側には鋳型面を合わせるために棒を差し込む凹みが 2 カ所みられる。



第 27 図　SK061 出土遺物実測図 (1/4)



第 28 図　その他の遺物実測図 1 (1/4)



第 29 図　その他の遺物実測図 2（1/4）

SE002(第 25 図)　SE001 の 1.5m北側に位置する。平面は円形を呈し、直径 3.4mを測る。断面は深さ 2.3mまでは漏斗状にすぼまり、その下は垂直に 32 ㎝掘り下げている。深さ 2.2mで井筒の痕跡を確認した。井筒底面の標高は 0.75mを測る。井筒掘方の埋土には赤褐色粘土を使用しているが、これらは高取焼き関連の廃棄土坑でも出土しているため、井戸が高取焼きの工房に関連して掘られたものと考えられる。陶磁器など多くの遺物が出土した。

SE124(第 25 図)　調査区北東側に位置する。平面は円形で直径 368 ㎝を測る。標高 1m 付近に平坦面を設け、中央に径 74 ㎝の井戸枠掘りこむ。深さ 243 ㎝で木組みの井戸枠が一部出土した。標高 0.68mで湧水点に達したため、掘り下げを中止した。埋土から陶磁器類など多量の遺物が出土した。出土遺物 (第 25 図 0056～0062)0056 は燭台である。緑灰色を呈す。0057～060 は窯道具である。0061 は陶器擂鉢で淡黄褐色を呈す。胎土中に細砂を含む。0062 は陶製の大型鉢である。小豆色を呈し、胎土中に 3 ㎜以下の白色砂を多く含む。器壁は厚さ 1.8 ㎝で口縁に厚さ 2.8 ㎝の突帯が付く。内面は板状工具による横ナデ、外面は突帯が横ナデ、その下は縦方向のハケ目を施す。

8) 高取焼き関連遺構と遺物

整地層 (第 26 図)　調査区全体で灰褐色と茶褐色質土の整地層が出土した。第 26 図の 7～13 層で標高は調査区中央部で 3.7m、南端で 3.5mを測る。西側の第 32 次調査地点でも確認されている。江戸時代に東側の皿山にあった高取焼きの工房が明治時代に西側に拡大したとされており、本調査区で確認された整地層はその作業面と考えられる。今回の調査では SK055・089・090 等で窯道具と共に多量の陶磁器が出土した。しかし磁器、陶器、素焼きの土器が混在するとともに器種、器形、文様が多

種多様で同じ器形、文様の器はなく焼け歪みなどの失敗例がみられないため、工房などで使用された生活用品と考えられる。今回の調査で出土した窯の廃棄品と思われる遺物は第 27 図 0066 の陶器擂鉢ただ 1 点のみである。高取焼きの窯自体はほとんど調査がなされないうちに破壊されてしまったが、窯近くの整地層と灰原を調査した 35 次調査 (福岡市埋蔵文化財調査報告書第 916 集『藤崎遺跡 17』2006 年) では多量の廃棄品が出土している。

9) その他の遺物

SK089 から陶磁器類と窯道具がまとまって出土した (第 28･29 図 0067～0095)。0067～0086 は窯道具である。製品に合わせて様々な大きさのトチンやハマ、サヤ鉢等が出土している。0087 は石製硯、0088 は陶器製片口擂鉢、0089 は不明土製品で上部に緑釉を施す。0090 は陶器製容器の底部、0091･0092 は素焼きの人形である。0093 は素焼きの甕口縁で復元口径 43.6 ㎝を測る。黄白褐色を呈し、胎土は精良である。0094 は瓦質の軒平瓦、0095 は陶器製の下ろし皿である。0096～0098 は 096 から出土した。0096 は火鉢口縁で上面に「福」の文字。紅顔外面にスタンプによる文様がみられる。0097･0098 は土製人形である。0097 は後頭部で髪や耳などは付かない。0099 は SE001 から出土した猿の土製品で遺存高は 5.9㎝を測る。淡褐色を呈す。西側にある猿田彦神社に関連するものか。0100 は 118 から出土した。0101 は 025 から出土した小型丸底壺である。0102 は壺小片、甕棺の副葬小壺だった可能性がある。0103 は須恵器坏蓋で 072 から出土した、復元口径 21.2㎝、器高 3.6 ㎝を測る。0104～0108 は土錘である。0104～0106 はⅡ区南壁清掃時に出土。0107 は 061 から 0108 は 058 から出土した。藤崎遺跡では漁労具である土錘が多く出土する。北側に浅い博多湾、南側の金屑側河口は当時湿地が広がっており、投網などの漁撈には適した環境だったと考えられる。

4．小結

今回の調査では新たな方形周溝墓と 32 次で検出した 2 号周溝墓に伴う新たな埋葬施設の出土が期待されたが、残念ながらどちらも出土しなかった。

今回の調査で検出した遺構は弥生時代が甕棺墓 20 基、溝 1 条と土坑群、柱穴状遺構群である。甕棺は近代の遺構に切られ遺存状態は不良である。土坑は甕棺に切られる土坑があり、甕棺墓群形成以前に遡る遺構の存在が判明した。SD075 は 22 次調査では出土遺物が少ないことから方形周溝墓の一部と推定していたが、今回の調査で弥生時代中期中頃の甕棺墓に切られていることから弥生時代中期以前に遡ることが判明した。遺構の性格は不明であるが、これより南には中期前半の大型甕棺が分布しないため区画溝の可能性がある。古墳時代の遺構は方形周溝墓の溝と溝の底部で出土した石棺墓、調査区の南端に位置する壺棺墓である。時期はいずれも古墳時代初頭と考えられる。古代は坏蓋など遺物は出土するものの確実な遺構は確認できなかった。中世の確実な遺構は 13 世紀の溝 (SD019) が出土した。唐津街道に沿うように東西方向に延び、現在 400ｍが確認されている。今回の調査で注目される点は弥生時代中期の溝の SD075 で埋土は黒褐色を呈す。これまでは弥生時代中期の甕棺埋土は黄白色砂で砂丘の砂と区別がつかず、甕棺掘方の検出は困難であったことから、中期までは砂丘上に表土が形成されておらず、表土が形成されて遺構埋土が黒色土するのは弥生時代後期後半からと考えられていた。SD075 では今まで考えられていたのより黒色土化が古くなるため、今後の調査で検討が必要である。

遺構番号	性　格	時　代	長径 × 短径 (cm)	深さ (cm)	遺　　物		備　考
0001	井戸	近世～近代	径　305	268	陶磁器（碗小片多、鉢、　擂鉢、捏鉢)、須恵器甕、須恵器坏蓋 (8 世紀)、土師坏 (不明)、瓦（素焼き　平・埼、瓦質　平・埼)、土師質大型鉢？、土鍋、七輪、土器片、甕棺 (弥生時代中期)、甕 (弥生時代中期)、鋳型 (漁撈用錘？), 鉄釘	破片はいずれも小片	井筒木桶？　径 70 ㎝
002	井戸	近世～近代	径　337	263	陶器片、火鉢、須恵器甕？、甕 (弥生時代？)、土器片、鉄片	遺物はいずれも小片	井筒木桶？　径 76 ㎝
002	井戸 (井筒)	近世～近代			磁器碗 (近世)、白磁碗 (古代末～中世)、須恵器甕 (古墳時代)、土器片、瓦質瓦 (平)、鉄釘		
003	溝	近世～近代	幅　1.4　～ 2.8m	90	近世陶磁 (碗、壺、捏鉢)、龍泉窯系青磁碗Ⅰ類、白磁片、陶器片、土師坏 (糸切り)、土鍋（12C 後半)、土師質大型鉢？ (近世)、土師坏・皿 (糸切り)、甕棺 (弥生時代中期前半)、丹塗磨研壺 (弥生時代中期)、甕 (弥生時代)、鉄片 (刀子？)、カラニシ (腹足類)		SE001 と 002 を結ぶ
004	甕棺	弥生時代	円形				
005	柱穴状遺構	不明	楕円　74×57	33	土器片（2 点　不明）		
006	柱穴状遺構	不明	楕円形　69×47	36	土器片？		
007	柱穴状遺構	弥生時代？	楕円形　51×37	37	甕棺片 (弥生時代中期)		
008	柱穴状遺構	弥生時代？	楕円形　67×33	35	土器片 (1 点　弥生時代甕？)		
009	土坑	弥生時代？	楕円形（102+α）×91	81	土器小片 (3 点のみ　弥生時代)		
010	甕棺	弥生時代			土器片 (1 点のみ　弥生時代中期？)		
011	溝状遺構	中世	長さ 167 ㎝　幅 57 ㎝	46	土師坏 (糸切り)、土鍋、甕 (弥生時代中期)、甕棺 (弥生時代中期)		
012	柱穴状遺構	弥生時代中期？	58×56	35	甕棺片 (弥生時代中期前半？)、土器片 (小壺片？)	遺物はいずれも小片で実測不可	
013	甕棺	弥生時代					
014	甕棺	弥生時代					
015	土坑？	弥生時代中期？	140 ？ ×115	不明	甕棺片 (弥生時代中期)		
016	土坑	中世	溝状（100+α）×55	38	土師質鍋 (外面煤付着　中世)、壺 (弥生時代中期前半)、土器片 (弥生時代)	壺は副葬小壺か	
017	甕棺	弥生時代					
018	甕棺	弥生時代					
019	溝	中世	幅　260	73	龍背窯系青磁碗Ⅰ類、陶器水柱？（13 世紀)、土鍋（12 世紀)、土師坏・皿（糸切り)、須恵器高台付坏（8 世紀)、須恵器坏（7 ～ 8 世紀)、須恵器壷？、須恵器坏蓋（6 世紀末)、須恵器甕 (古墳時代)、甑取手（古墳時代)、竈（古墳時代)、甕棺（多　弥生時代中期)、壺（弥生時代中期)、甕（弥生時代中期)、甑取手、鉄片、鉄滓、滑石片		SD128 と同一遺構
020	欠番						
021	土坑	不明	(90+α）×88	117	土器小片 (1 点のみ)		
022	柱穴状遺構	弥生時代？	(47+α）×56	20	土器片 (3 点のみ　弥生時代？)		
023	柱穴状遺構	弥生時代中期前半？	76×30	21	甕棺片 (弥生時代中期前半)		
024	柱穴状遺構		楕円形　38×29	37			
025	土坑	近世～近代	長方形 183 以上 ×140	62	近世陶磁 (壺、蓋、捏鉢)、小型丸底壺 (古墳時代前期)、広口壺 (弥生時代中期)、土器片 (弥生時代～古代)、鉄釘、トチン、サヤ鉢		SD029 を切る。Ⅱ区では検出できなかった
026	柱穴状遺構		円形？　(28+α)×(30+α)	10			034 に切られる
027	柱穴状遺構	弥生時代中期？	円形　径 67 ㎝	18	壺片 (1 点　弥生時代中期前半)、土器片 (1 点　弥生時代)		
028	溝	古墳時代前期？	1.3m以上	8			
029	溝	古墳時代前期	3m	76	台付直口壺、土師器大型壷、土師甕、土器片		
030	包含層 (黒色砂層)	弥生時代	4 m×3m	15	土器片 (2 点　甕棺片か)		
031	柱穴状遺構	不明	(53+α）×72	51	土器片 (3 点のみ　不明)		SE002 に切られる
032	甕棺	弥生時代中期					012 に切られる
033	土坑	近代	楕円　(80+α）×（50+α）	41	陶器片 (1 点)、甕 (弥生時代中期中頃　丹塗り)		他の土坑に切られる
034	柱穴状遺構	不明	円形　82×(58+α)	32	土器片 (弥生時代？)		
035	柱穴状遺構	中世	円形　52×(48+α)	21	土器片 (弥生時代～中世)、軽石 (1 点)		
036	柱穴状遺構	不明	円形　(42+α)×(37+α)	4	陶器壺？（不明)、甕 (須玖Ⅱ式)		035 に切られる
037	土坑	近代	不明　(200+α)×(120+α)	54	陶磁器 (碗、染付小碗、壺)、土器片 (不明)、サヤ鉢		044 を切り 025 に切られる
038	土坑	弥生時代？	長方形　161×113	76	甕棺片 (2 点)、土器片 (2 点)、軽石 (1 点)		
039	溝状遺構	弥生時代？	長さ 210+α　幅 96	68	甕棺（細片　8 点）		
040	土壙墓？	中世	155×49	50	土師坏 (糸切り)、土器片 (甕棺片か)		
041	土坑		(91+α)×(110+α)	38			標石あり　SD019 に切られる
042	柱穴状遺構	12 世紀後半	131×34	28	龍泉窯系青磁碗Ⅰ類、須恵器大甕		
043	溝 (包含層)？	弥生時代		2	甕棺 (中期前半)		
044	溝状遺構	弥生時代～古墳時代初頭	幅 276	62			SD029 に切られる
045	柱穴状遺構？	弥生時代？	不明	不明	甕棺片		
046	柱穴状遺構	弥生時代中期	(45+α)×49	20	広口壺（弥生時代中期）	1 個体の 1/4 程度　接合可	136 と同一遺構
047	柱穴状遺構	弥生時代中期	48× 4 1	32	甕棺片 (2 点)		
048	甕棺（小児棺）	弥生時代中期	掘方不明				
049	甕棺（小児棺）	弥生時代中期	掘方不明				
050	攪乱	現代	円　84×84	25	磁器（湯飲み、碗、タイル)、陶器片、陶器擂鉢、土師坏、七輪、鉄滓、鉄釘、銅貨		
051	攪乱	現代	楕円　95×90	46	コンクリート、タイル、白磁片、陶器（土管、高坏、擂鉢)、瓦質平瓦、素焼擂鉢、須恵器甕（古墳時代)、炉壁、土器片（弥生時代～近世)、鉄片 (多)		
052	攪乱	現代	楕円 70×55	46	陶器壺、炉壁、トチン？、土器片（弥生時代～中世)、甕棺（弥生時代)、瓦質瓦、鉄釘、石炭		
053	土壙墓？	中世後半以降			鉄製鋏、銅銭（6 枚)、土器片（小片　弥生時代～古墳時代)、人骨（下顎）		雨のため崩壊
054	廃棄土坑	近代	96×95	58	陶磁器類（碗、壺、甕、蓋　擂鉢等多い)、窯道具（多)、素焼き（七輪、甕、人形、甕、壺、盤)、瓦質瓦、ガラス小瓶、鉄釘、甕棺（弥生時代中期前半)、貝	陶磁器類は小片が多い	
055	攪乱（植樹痕）	近現代	楕円 335×301	53	ガラス瓶、染付碗、陶器片須恵器甕、瓦質火鉢 (大型)、瓦 (瓦質)、土師坏、トチン、		
056	溝状遺構	不明	131×34	7	土器片 (1 点のみ)		057 に切られる
057	柱穴状遺構	不明	楕円形　34×25	23	土器片 (1 点のみ)		SD029 を切る
058	攪乱	近代	方形　72×73	25	陶磁器 (碗、皿)、瓦 (瓦質)、土師皿 (糸切り)、甕 (弥生時代)、土器片（弥生時代？)、土錘（1 点)、トチン、石炭、鉄片		
059	攪乱	近現代	不整形　106×43	44	陶器片、須恵器甕、土師質壺？、土師器片、瓦質瓦、鉄釘		
060	包含層？	近現代	285×101	16	磁器碗片、陶器片、土師坏・皿（糸切り)、土師質擂鉢、高坏 (須恵質　古墳時代)、須恵器坏？、須恵器坏蓋 (7C)、瓦器椀、土器片 (弥生時代)、瓦質瓦、土錘、窯道具（輪トチン、サヤ鉢)、鉄釘、砥石		061 に切られる
061	土坑	近現代	不整円形 157×170	69	磁器（壺、紅皿)、陶器（碗、鉢、花差し、擂鉢、七輪、壺 - 焼けひずみ？)、陶器擂鉢（焼けひずみ)、窯道具（トチン等多)、土鍋？、須恵器坏？、瓦（瓦質　今宿五郎左衛門の銘有り)、土器片、土錘		SD071 を切る。052 に切られる
062	壺棺墓	古墳時代初頭	90×62		龍泉窯系青磁碗Ⅰ類、土器片（小片 7 点　古墳時代？）	龍泉窯系青磁碗は 1 段下げで出土	
063	柱穴状遺構	不明	円形　82	7	白磁碗（時期不明)、甕（弥生時代？)、土器片（2 点）		
064	溝状遺構	古墳時代？	84×40	42	土器片（4 点　古墳時代？）		
065	柱穴状遺構	不明	楕円　40×35	25	土器片（小片　2 点）		
066 上層	SD060 と SD075 の一段下げ	中世			〔上層〕土師皿 (糸切り)、土器片（多　弥生時代）〔1 段下げ〕須恵器坏蓋？、土器片（弥生時代？）		SD060 と SD075 の一段下げ
066	包含層	古墳時代末～古代			須恵器（壺？)、甑取手、甕棺（弥生時代中期前半)、甕（弥生時代中期前半)、土器片（不明)、鉄滓		
067	柱穴状遺構	古墳時代末～中世	楕円 (31+α）×27	44	須恵器坏蓋（かえし付　6 世紀後半)、土器片（土師器高台付坏 or 土師椀）		
068	柱穴状遺構	6 世紀	54×51	28	須恵器坏蓋（6 世紀)、土器片（不明）		069 を切る
069	柱穴状遺構	不明	37×31	24	土器片（3 点のみ　不明）		
070	溝状遺構	近代	幅 94	35	陶器（碗？)、トチン、須恵質浅鉢（or 坏蓋)、甕棺（弥生時代中期後半)、甕（弥生時代中期)、須恵器片、土器片（弥生時代？）		
071	溝状遺構	近世～近代	幅　126	44	陶器鉢？、陶器片、須恵器甕、土師坏（糸切り)、瓦質土器片、甑、土器片（弥生土器が主)、	破片はいずれも小片	
072	乞含層	古代末			須恵質坏蓋（070 出土と同一個体か）		須恵質坏蓋出土
073	溝状遺構	近世～近代	幅 80 以上	48	陶器擂鉢（近世～近代？)、土師質鉢、土師坏・皿（糸切り)、土師質碗、須恵器坏蓋（7 世紀)、須恵器高坏、須恵器壷？、土器片（弥生時代～中世）		SD071 と同一遺構

遺構一覧 2

遺構番号	性　格	時　代	長径 × 短径 (cm)	深さ (cm)	遺　　物		備　考
074	包含層	弥生～古墳時代初頭	5m×4m		甕？（弥生～古墳時代）		ＳＫ062 に切られる
075	溝	弥生時代中期	幅 126　長さ 8m以上	22	甕棺片（弥生時代）、甕（弥生時代中期）、		SD029･ST114 に切られる
076	柱穴状遺構	近世～近代	楕円形　26×24	38	染付碗		
077	柱穴状遺構	不明	82×(68+α)	27			
078	柱穴状遺構	弥生時代？	不整円形　56×(49+α)	9	土器片（1 点　弥生時代）		
079	土坑	不明	長方形 (140+α)×(94+α)	18	土器片（1 点のみ）		SK073･081 に切られる。
080	柱穴状遺構	6 世紀	径　51	20	須恵器坏蓋（6 世紀）、土器片（3 点　弥生時代）		SD071 に切られる
081	包含層	近代	(160+α)×(130+α)	19	磁器片（碗？）、陶器碗、土師坏、甕棺、土器片（不明）		073･085 に切られる
082	土坑	不明	楕円　128×102	25	遺物無し		SP077 に切られる
083	柱穴状遺構	不明	円　42×41	14	遺物無し		SK079 を切る
084	石棺墓	不明	152×38	20	遺物無し		SD029 に伴う
085	柱穴状遺構	近代	楕円 56×52	22	陶器片（皿、甕）		
086	柱穴状遺構	古代末～中世	楕円　(98+α)×66	32	白磁碗 (小片 1 点)、土器片 (1 点)		
087	土坑	近代	円　83×93	49	磁器碗、陶器片（大甕、甕、壺、擂鉢　各複数）、七輪、火鉢、甕（弥生時代）		
088	溝状遺構	近世以降	長さ 265 以上　幅 53	16			
089	廃棄土坑	近代	径約 60 ㎝		陶磁器 (碗、小碗、染付皿、皿、角皿、壺、瓶、蓋など)、磁器 (灯明皿、湯飲み碗、急須、擂鉢、捏鉢、甕、蓋、皿、擂皿、下ろし皿など)、窯道具 (ハマ、サヤバチ)、瓦質 (瓦、火鉢、七輪)、素焼き (壺、坏、捏鉢、七輪、坏、皿、人形)	磁器、陶器とも多種多様。磁器は同型、同模様のものはほとんど無い程多種。陶器は擂鉢が多いが、器高･器径はバラバラである。破片は小片が多く、焼けひずみはみられない。素焼き人形片多い。窯道具多い．高取焼き窯関連？	
090	廃棄土坑	近代	約 110 ㎝		陶磁器（多量）窯道具（多）		高取焼き窯関連
091	柱穴状遺構	不明	楕円　43×36	26	なし		071 に切られる
092	攪乱	現代	長方形　103×81	30	陶磁器（高台付皿、甕、碗、盃、小壺、徳利、鍋）、サヤ鉢、瓦質瓦、土師坏（糸切り）、鉄釘、鹿角（加工痕有り）		
093	柱穴状遺構	近代	楕円形　86×48	15	磁器皿、磁器碗、土師皿（糸切り）、軽石		111 を切る
094	甕棺	弥生時代			甕棺（弥生時代中期前半）、土器片（弥生時代）		SK146 に切られる
095	甕棺	弥生時代					041 と切り合い有り
096	攪乱	現代	楕円　71×60	16	陶磁器片（鉢、碗、瓶）、輪トチン？、壺？（弥生時代中期　丹塗り）、甕（弥生時代）、土器片、鉄片、石炭		097･107 を切る
097	柱穴状遺構	中世	楕円　72×66	38	土師坏（糸切り）、甕（複数　弥生時代）、鉄滓		
098	土坑	現代	楕円　83×76	35	磁器片（タイル、碗、皿）、陶器片（甕、壺）、甕（弥生時代）、土器片（1 点不明）、鉄片		
099	甕棺	弥生時代中期					
100	柱穴状遺構	弥生時代	楕円　(62+α)×62	39	土器片（弥生時代）		101 を切る
101	土坑	弥生時代中期前半	不明　140×(83+α)	26	土器片（2 点　弥生時代中期前半）		100 に切られる
102	土坑？	近世～近代	楕円？　(99+α)×78	16	陶器（小碗、甕）、七輪、甕（弥生時代中期）、鉄片		103 を切る
103	土坑	古墳時代後期以降	楕円？　239×(88+α)	44	須恵器はそう？、素焼き甕 (不明)、土器片 (不明)		102 に切られる
104	甕棺	弥生時代中期					
105	柱穴状遺構	中世以降	楕円　36×30	38	土師坏（1 点　糸切り）、甕（弥生時代）		ST104 を切る
106	土坑	近代	楕円　120×100	9	土器片 (小片 1 点)		105 に切られる
107	土坑	近世から近代	長方形　205×113	23	陶器碗（近世～近代）、土錘、土器片（丹塗り　弥生時代）、土器片（不明）、		096･106 に切られる
108	土坑	弥生時代中期	107×(88+α)	25	土器片（弥生時代）		ST120 に切られる
109	土坑	弥生時代中期以前	149×125	60	土器片（1 点　不明）		SK108 に切られる
110	包含層？	弥生時代中期前半	約 4m×2.5m	不明	甕棺片（弥生時代中期前半）、広口壺（弥生時代中期前半）		
111	土坑	古代（7～8 世紀）	楕円形　184×141	82	須恵器高台付坏（7～8 世紀）、甕（古代？）、甕棺片（弥生時代）、鉄滓		093･116 に切られ、117 を切る
112	土坑	弥生時代中期	楕円　203×148	111	土器片（4 点　弥生時代）		118 を切り 075･114 に切られる
113	柱穴状遺構	弥生時代中期	楕円形　43×33	35	甕（弥生時代中期）		
114	甕棺	弥生時代中期					075･112 を切る
115	柱穴状遺構	近現代	(84+α)×(70+α)	38	陶器碗（1 点　近世～近代）、土器片（2 点　不明）		SD073 に切られる
116	土坑	不明	楕円　93×83	41	土器片（1 点　不明）		111 を切る
117	土坑	弥生時代	不整形　273×154	78	土師皿？（1 点）、土器片（3 点　不明）		078･093･108･111 に切られる
118	土坑	弥生時代中期前半	方形？　90×80	42	甕棺（破片　多　弥生時代中期前半）	小片が多く接合不可	112 に切られる
119	土坑	弥生時代中期前半	152×112	118	甕棺 (中期前半　2 個体　両方とも口縁の一部のみ)		
120	甕棺	弥生時代中期					ＳＤ075 を切る
121	甕棺	弥生時代中期					
122	甕棺	弥生時代中期					
123	井戸	近代	径　135	不明	コンクリート片、磁器碗、輪トチン、須恵器甕（古墳時代後期）、土器片（弥生時代）		SD019 を切る
124	井戸	近代	368×362	280	磁器（大甕、染付小碗）、陶器類（碗、灯明皿、甕、蓋、盃、擂鉢、窯道具等）、素焼き（大甕、大型鉢、擂鉢、七輪、土師皿）、瓦質瓦（平・丸・埼）、須恵器大甕、須恵器坏 (6 世紀後半)、甕棺（弥生時代中期前半）、甕（弥生時代中期）、寛永通宝（1 枚）、鉄片（多）	遺物多いが、小片が多い	
125	柱穴状遺構	不明	楕円形　61×57	23	土器片（2 点　不明）		132･149 を切る
126	近代井戸	近代	楕円形　126×99	不明	磁器（碗、皿）、陶器（甕、鉢、碗、土管）、瓦（土師質-平、土師質-丸）、須恵器高台付坏（8 世紀）、銅製品、七輪、トチン、電線用磁器		133 を切る
127	包含層	近代	不明		土師坏（糸切り）、土器片（弥生時代～中世）		高取焼き窯関連整地層か
128	土坑	12 世紀以降	長方形？ (55+α)×64	67	須恵器（甕、壺？）、土師皿・坏 (糸切り)、土器片 (小片のみ)、滑石石鍋 片		
129	柱穴状遺構	中世	52×34	47	甕棺 (弥生時代)、土器片 (土鍋？)		
130	柱穴状遺構	不明	円形　45×42	66	土器片 (小片 2 点のみ)		
131	柱穴状遺構	中世以降	楕円形　57×45	45	土鍋（1 点　中世）、土器片（1 点　不明）		SD019 を切る
132	柱穴状遺構	不明	楕円形　87×65	62	土器片（2 点　不明）		125 に切られ、149 を切る
133	土坑	不明	楕円形　143×95	24	土器片（3 点　不明）		148 を切る
134	土坑	不明	178×77				
135	甕棺	弥生時代中期					SE124 に切られる
136	柱穴状遺構	弥生時代中期	(45+α)×49	20	壺（弥生時代中期）、甕（弥生時代中期）		046 と同一遺構
137	溝状遺構	弥生時代中期	長さ 113　幅 44	42	甕棺片（弥生時代中期）		
138	柱穴状遺構	弥生時代？	不整形　44×40	8	土器片（2 点のみ　弥生時代か）、鉄片（1 点）		
139	柱穴状遺構	弥生時代？	不整形　54×54	59	土器片（2 点のみ　弥生時代か）		
140	柱穴状遺構	不明	楕円形　(76+α)×66	52	土器片（4 点のみ　不明）		130 に切られる
141	柱穴状遺構	不明	楕円形　72×58	27	土器片（5 点　不明）		
142	甕棺	弥生時代中期					143･144 に切られる
143	攪乱	現代	楕円形　(45+α)×45	不明	土師坏、土器片（3 点）		ST142 を切る
144	土坑	弥生時代	102×73	66	土器片（4 点　甕棺か）		138 に切られる
145	柱穴状遺構	弥生時代？	不整形　54×43	42	土器片（2 点　弥生時代）		128 に切られ、156 を切る
146	土坑	不明	153×226	121	土器片（3 点　不明）		
147	柱穴状遺構	不明	円形　50×46	61	土器片（1 点　不明）		
148	柱穴状遺構	不明	円形　57×50	75	土器片（2 点　不明）		
149	柱穴状遺構	不明	楕円形　(44+α)×51	44	土器片（2 点　不明）		
150	柱穴状遺構	不明	楕円形　54×45	14	土器片（1 点　不明）		
151	柱穴状遺構	弥生時代中期	楕円形　71×55	40	甕棺片（1 点）		
152	柱穴状遺構	弥生時代	楕円形　69×49	34	土器片（1 点　弥生時代）		SD019 を切る
153	土坑	不明	楕円形　(83+α)×79	72	土鈴（破片　1 点のみ）		155 を切る
154	柱穴状遺構	中世？	不整形 64×57	50	土鍋？（1 点　中世）、甕棺（1 点　弥生時代中期）		
155	土坑		不明　(80+α)×116	44			153･156 に切られる
156	土坑	中世？	楕円形　180×99	49	土器片（不明）		128 に切られ、155 を切る
157	柱穴状遺構	中世以降	楕円　40×34	31	白磁碗片（1 点）、土器片（1 点　不明）		
158	柱穴状遺構	弥生時代中期	楕円　64×54	23			SD019 を切る
159	土坑	弥生時代中期	200×127	61			
160	土坑	弥生時代中期	(120＋α)×(180＋α)	113			

1. Ⅰ区（東から）

2. Ⅱ区（東から）

1. Ⅲ区全景（北から）

2. Ⅳ区全景（西から）

1. Ⅰ区甕棺出土状況（東から）

2. ST004（西から）

3. ST004 下甕（南から）

4. ST004　人骨出土状況（南から）

5. ST010（東から）

6. ST010 下甕（南から）

7.ST010 下甕（東から）

8. Ⅲ区全景（西から）

図版 4

1.ST013(北から)

2.ST013 （西から）

3. ST014(南から).

4. ST014 下甕 (北から)

5. ST014 人骨出土状況

1. ST017(北から)

2. ST017 下甕 (北から).

3. ST017 人骨出土状況 (南から)

4. ST018(西から)

5. ST018 副葬小壺出土状況 (西から)

6. ST018 下甕 (南から).

7. ST018 人骨出土状況 (北から)

8. ST032(南から)

図版 6

1．ST048(左)･049(西から)

2．ST094(左)･ST095(南西から)

3．ST094(北から).

4．ST094 下甕 (北から)

5．ST095(西から)

6．ST095 人骨出土状況 (南から)

7．ST099(東から)

8．ST099 下棺 (東から)

1. ST104(西から) (2)

2. ST104(東から)

3. ST114 出土状況 (東から)

4. ST114(東から)

5. ST114 下掘方 (東から)

6. ST120(東から)

7. ST120 下面 (東から)

8. ST120 下棺 (東から)

1. ST121(奥側)･ST122 出土状況 (西から)

2. ST121(西から)

3. ST122(西から)

4. ST134･135･142 出土状況 (西から)

5. ST134(南から)

6. ST135(南から)

7. ST135 下甕 (南から)

8. ST135 人骨出土状況 (南から)

1. ST142(南西から)

2. ST142 掘方 (南西から)

3. SK062(東から)

4. SK062(西から)

5. SK084(東から)

6. SD029(北から)

7. SD029 土層 (東から)

8. SD029 遺物出土状況

1．SD019 東壁土層（西から）

2．SD019 西壁土層（東から）

3．SD071（東から）

4．SD075（東から）

5．SD075 土層（西から）

6．SK061（南から）

7．SK070（南から）

8．SK109 土層（西から）

1. SK038(東から)

2. SK041(東から)

3. SK111(北東から)

4. SK112 土層 (南東から)

5. SK117(東から)

6. SK118 土層 (南東から)

7. SK119(北から)

8. SK156 土層 (西から)

1. Ⅱ区西壁土層 (東から)

2. Ⅱ区南側 (東から)

3. SE001(西から)

4. SE001 井筒 (北から)

5. SE002(東から)

報　告　書　抄　録

ふりがな	ふじさきいせき 19
書　　名	藤崎遺跡 19
副　書　名	－藤崎遺跡第 37 次調査報告 －
シリーズ名	福岡市埋蔵文化財調査報告書
シリーズ番号	第 1240 集
編 著 者 名	屋山　洋
編 集 機 関	福岡市教育委員会
所　在　地	〒810-8621 福岡県福岡市中央区天神 1 丁目 8 - 1
発行年月日	平成 26 年 3 月 24 日

ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	コード		北緯	東経	発掘期間	発掘面積 ㎡	発掘原因
		市町村	遺跡番号					
はかたいせきぐん 博多遺跡群 (第 193 次)	ふくおかしさわらく ふじさき 1 ちょうめ 9 ばん 福岡市早良区 藤崎 1丁目9 番	40137	0307	33°34′52″	130°20′53″	20120610 ～ 20120914	358 ㎡	記録保存 調査

所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項
博多遺跡群 第 193 次	集落	弥生時代～近世	甕棺墓・方形周溝墓・石棺墓・土坑・溝・井戸	弥生土器･土師器･須恵器･貿易陶磁･近世陶磁	

要　約

調査地点は博多湾に面した東西方向に長い砂丘の尾根近くに位置する。甕棺墓 20 基、方形周溝墓の溝 1 条、石棺墓 1 基、溝 3 条の他に多数の土坑と柱穴状遺構が出土した。甕棺墓は弥生時代前期後半から中期中頃で尾根に沿って東西 200m、南北 50mの範囲に分布し、これまで約 200 基以上出土している。古墳時代初頭の方形周溝墓もほぼおなじ範囲に分布しており、現在 16 基が確認されて、墓壙から 3 枚、それ以外に 2 枚の青銅鏡が出土している。今回の調査区でも新しい方形周溝墓の出土が期待されたが、西側隣接地で出土した 2 号周溝墓の溝の続きを確認しただけであらたな埋葬主体は確認できなかった。溝は弥生時代中期前半と 13 世紀後半、近世～近代の 3 条で、それぞれ 22 次と 32 次でも出土している。土坑は甕棺墓に切られる径 2m程の大型土坑が 2 基出土したが、甕棺墓より古い土壙墓の可能性が考えられる。近代になると高取焼き窯の作業場になり、廃棄土坑から多数の窯道具が出土した。

福岡市埋蔵文化財調査報告書第1240集

藤崎遺跡19

―藤崎遺跡第37次調査報告―

2014年(平成26年)3月24日

発　行　福岡市教育委員会

福岡市中央区天神1丁目8番1号

発　行　株式会社月成印刷

福岡市博多区大井2－13－27